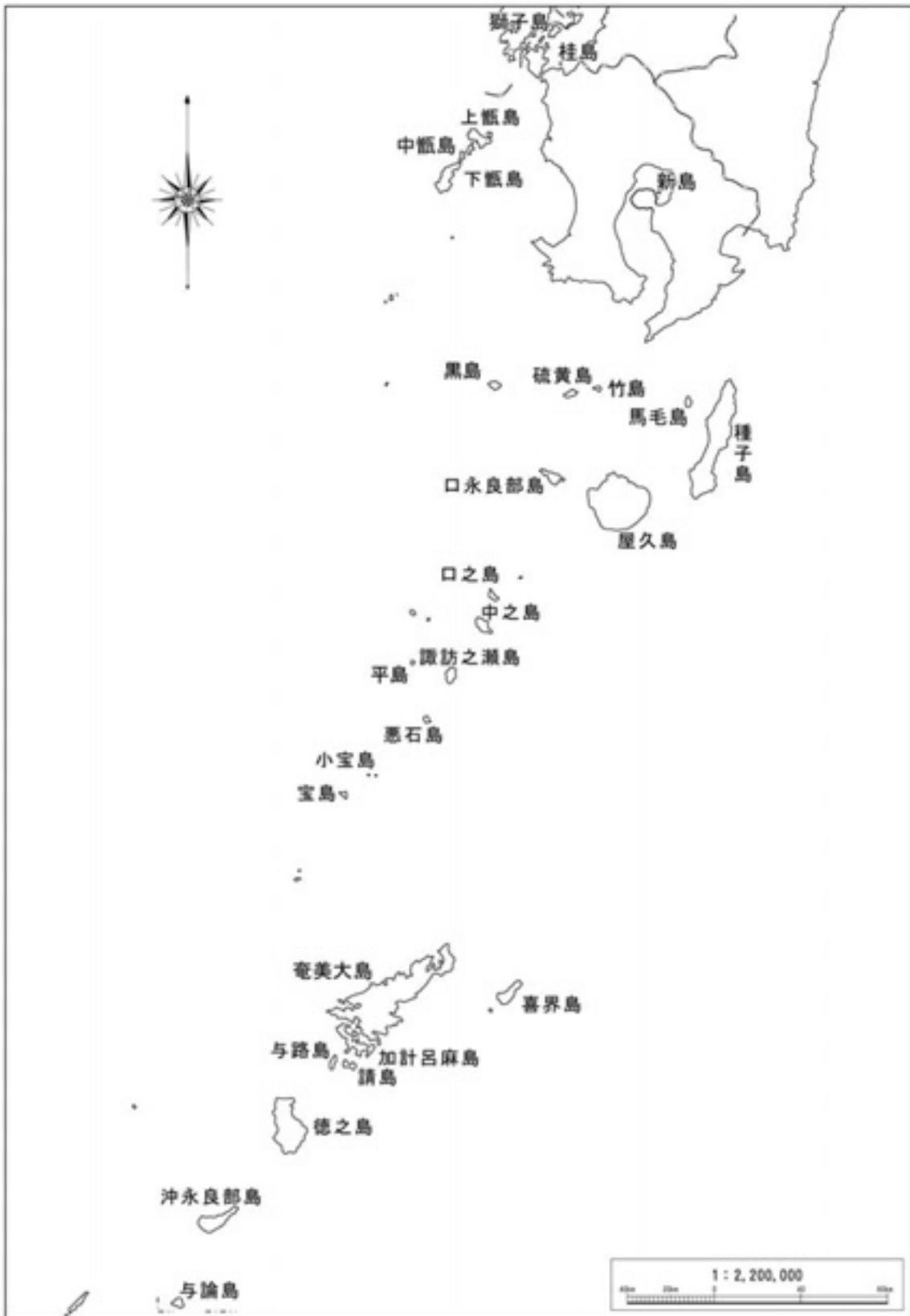


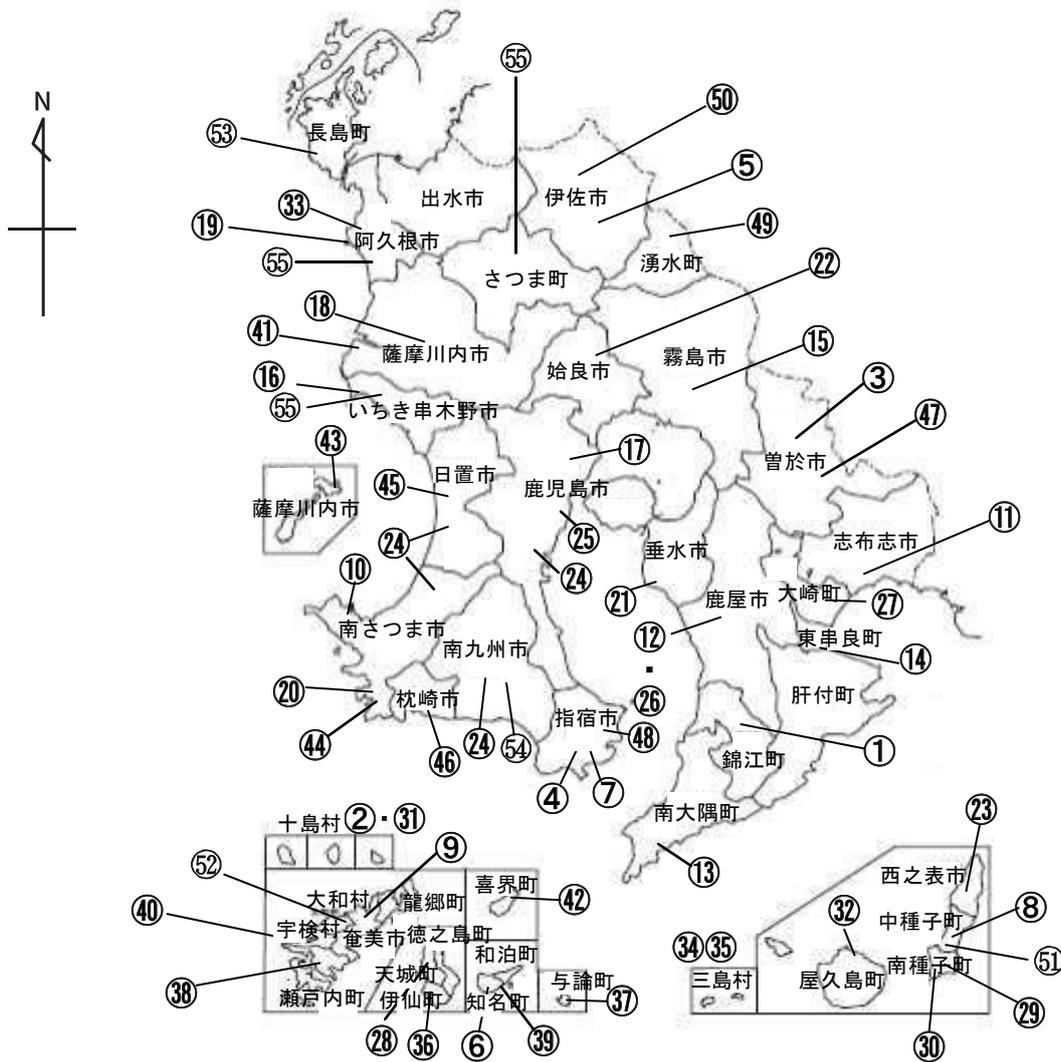
第3章 かごしまの祭り・行事 詳細調査報告

鹿児島県地図



[提供：徳田屋書店（鹿児島市）]

詳細調査実施か所の位置図



①旗山神社の「柴祭り」	②七島正月	③熊野神社の鬼火焚きと鬼追い
④ダセチッ（出せ突き）	⑤モグラ打ち	⑥知名町瀬利覚の墓正月
⑦利永のメンドン	⑧増田（種子島）中之町の町祈祷	⑨節田マンカイ
⑩片浦お伊勢講祭り	⑩山宮神社のお田植え行事と安楽神社の田打ち行事	
⑫田崎神社の「鹿祭り」	⑬御崎祭り	⑭廣田神社の春祭り
⑮鹿児島神宮の「初午祭」	⑯いちき串木野市羽島崎神社春祭り	⑰本城花尾神社春祭り
⑱田の神戻し	⑲ひな女祭り	⑳唐カラ船祭り
㉑終原のおろごめ	㉒加治木くも合戦	㉓横山（種子島）の盆踊り
㉔六月燈	㉕おぎおんさあ	㉖田崎神社の「夏越祭り」
㉗七夕市と精霊迎え	㉘前野御田植行事	㉙平山広田（種子島）の石塔祭り
㉚西之（種子島）本国寺盆踊り	㉛悪石島のボゼ	㉜楠川地区の岳参り行事
㉝阿久根市波留の南方神社の神舞	㉞薩摩硫黄島のメンドン	㉟黒島黒尾神社大祭
㊱イッサンサン	㊲按司根栄神社のシヌグ祭り	㊳油井の豊年踊り
㊴上平川の大蛇踊り	㊵シバサシ	㊶川内大綱引
㊷節浴（シチャミ）	㊸里八幡神社の内侍舞	㊹坊ほぜどん
㊺妙円寺詣り	㊻鹿籠の太鼓踊り	㊼弥五郎どん祭り
㊽亥の日の石突き	㊾大王殿（ウォードン）祭り	㊿湯之尾神社の神舞
①熊野神社（種子島）願成就祭り	②湯湾釜の餅もれ	③唐隈の山ン神
④峯苔のウッガン祭り	⑤隠れ念仏の祭り	

各テーマに該当する詳細調査の祭り・行事一覧

※()内の数字はページ

	テーマ名	該当する主な祭り・行事		
1	大火を焚くことに特色のある祭り・行事	熊野神社の鬼火焚きと鬼追い(53)		
2	山車・屋台・船などの出ることによる特色のある祭り・行事	いちき串木野市羽島崎神社春祭り(113)		
3	鉦・旗・おはげなどの標識物を用いることに特色のある祭り・行事	おぎおんさあ(151)	坊ほぜどん(231)	
4	臨時のつくりものや特別な装置を用いる祭り・行事	六月燈(147)	イッサンサン(195)	上平川の大蛇踊り(209)
		坊ほぜどん(231)		
5	供物や料理に特徴のある祭り・行事	平山広田(種子島)の石塔祭り(167)		
6	頭屋・宮座などの組織による祭り・行事	(該当なし)		
7	一年神主などの祭祀形態に特色のある祭り・行事	(該当なし)		
8	村組織による祭り・行事	知名町瀬利覚の墓正月(65)	節田マンカイ(79)	前野御田植行事(163)
		黒島黒尾神社大祭(189)	熊野神社(種子島)願成就祭(263)	湯湾釜の餅もれ(267)
9	村連合の祭り・行事	七島正月(47)	利永のメンドン(69)	坊ほぜどん(231)
		鹿籠の太鼓踊り(239)		
10	競技を伴う祭り・行事(綱引き・凧揚げ・相撲・競馬・船漕ぎ・弓射など)	唐カラ船祭り(129)	油井の豊年踊り(205)	川内大綱引(217)
		亥の日の石突き(251)		
11	託宣・占いなどを伴う祭り・行事	里八幡神社の内侍舞(227)		
12	子どもの成長祈願・氏入りなどを目的とする祭り・行事	ひな女祭り(125)	唐カラ船祭り(129)	節浴(シチャミ)(223)
13	若者入り・成人祝いなどを目的とする祭り・行事	片浦お伊勢講祭り(83)		
14	新婚祝いを目的とする祭り・行事	ダセテツ(出せ突き)(57)		
15	悪霊防衛(防ぎ)・悪霊送り・神送りを目的とする祭り・行事	旗山神社の「柴祭り」(41)	利永のメンドン(69)	片浦お伊勢講祭り(83)
		薩摩硫黄島のメンドン(187)	シバサシ(213)	
16	自然現象に対する祈願(雨乞い・日乞い・風除けなど)を目的とする祭り・行事	楠川地区の岳参り行事(177)		
17	田の神・恵比寿などの生業に関わるカミに対する祭り・行事	御崎祭り(99)	田の神辰し(121)	イッサンサン(195)
		坊ほぜどん(231)	亥の日の石突き(251)	
18	正月に行われる特色ある祭礼・行事	七島正月(47)	ダセテツ(出せ突き)(57)	
		利永のメンドン(69)	節田マンカイ(79)	
19	盆の時期に行われる特色ある祭礼・行事	横山(種子島)の盆踊り(141)	七夕市と精霊迎え(159)	平山広田(種子島)の石塔祭り(167)
		西之(種子島)本国寺盆踊り(171)	悪石島のボゼ(175)	阿久根市波留の南方神社の神舞(183)
20	節供(三月節供・五月節供)に行われる特色ある祭礼・行事	唐カラ船祭り(129)	椋原のおろごめ(133)	
21	予祝を伴う春の祭り・行事	山宮神社のお田植え行事と安楽神社の田打ち行事(89)	廣田神社の春祭り(105)	鹿児島神宮の「初午祭」(109)
		いちき串木野市羽島崎神社春祭り(113)	本城花尾神社春祭り(117)	
22	仮面神の巡行を中心とした祭り・行事	田崎神社の「鹿祭り」(95)	弥五郎どん祭り(245)	大王殿(ウオードン)祭り(255)
23	来訪神を中心とした祭り・行事	利永のメンドン(69)	悪石島のボゼ(175)	薩摩硫黄島のメンドン(187)
24	島津義弘公を中心とした祭り・行事	加治木くも合戦(137)	川内大綱引(217)	妙円寺詣り(235)
25	綱練・綱引きがある祭り・行事	川内大綱引(217)		
26	琉球と関連がある祭り・行事	知名町瀬利覚の墓正月(65)	按司根栄神社のシヌグ祭り(199)	上平川の大蛇踊り(209)
27	森や樹木、山岳に関わる祭り・行事	楠川地区の岳参り行事(177)	唐隈の山ん神(271)	
28	真宗禁制に関わる祭り・行事	隠れ念仏の祭り(279)		
29	災厄・災害・事故に関わる祭り・行事	増田(種子島)中之町の町祈禱(75)	片浦お伊勢講祭り(83)	田崎神社の「夏越祭り」(155)
		大王殿(ウオードン)祭り(255)	湯之尾神社の神舞(259)	
30	その他(島津の歴史にちなんだ祭り・行事)	峯苔のウッガン祭り(275)		

1 旗山神社の「柴祭り」

はたやまじんじや
しばまつ

- 〔別 名〕なし
- 〔伝 承 地〕肝属郡錦江城元 旗山神社
- 〔実施時期〕一月二日～四日
- 〔実施場所〕旗山神社
- 〔伝承組織〕なし

〔名称〕 旗山神社の「柴祭り」は、正月に当たって、農作業や狩猟の「事始め儀礼」と、領域内を清めて回る「柴立て神事」の二つが複合した祭礼である。「柴立て神事」の方が、主要な祭礼であることから、「柴祭り」と呼んでいるのだろう。

〔実施場所〕 大隅半島南部山間部の錦江町城元池田集落を中心に安水集落、白井集落、池田集落から約二キロメートル北西の高尾山山頂の高尾神社までが祭りの圏内。

〔実施時期〕 旗山神社の正月行事である「柴祭り」は、一二月三〇日のカンシバ（神柴）切りに始まり、正月二日の旗山神社のシウホイ（宮司）宅の「正月事始め儀礼」と、安水・白井集落で行われる「立神社の神迎え儀礼」、「農耕事始め儀礼」。三日の「狩猟事始め儀礼」。四日の「柴立て神事」と続き、年の始めに当って「事始め」や「狩猟や農耕の予祝」、「領域内の清め儀礼」等が混在した内容を持つ祭りである。



錦江町旗山神社周辺



一のシバでの祈禱

「実施内容」

1 一二月三〇日のカンシバ切り

祭りに使う神柴（榊）を切ってくる。旗山神社のある池田地区には川北と川南の地区があり、注連縄作りとシバ切りは、それぞれの地区民が一年交代で行う。柴を切る場所は半が石山である。神柴は、三〇日は神社前の大楠の根本に置き（休んでいただくとしよう）、大晦日に神社に運び入れる。

2 一二月三一日のシバ伏せ

三一日は、鳥居や拝殿の柱に柴を飾る。残りは、本殿の東南の角に裏返しにして置く。これを「柴伏せ」と言う。

3 一月二日

(1) 事始め

ショウホイ（官司）宅に伶人の一人が午前九時に来た。もう一人の伶人は、年末に親戚が死亡したので、今年の祭りには欠席。二人で、サンゴンサカズキ、吸い物等をいただき、櫛起こし（櫛で髪をすき、剃刀で顔をあたる）、針起こし、唄始め（安水集落で歌う唄を一通り歌う。）の事始め神事を行う。その後、神社で祭典を行い、後車で安水集落に向かう。

(2) 立神神社の祭典と田打ち神事

午前一〇時一五分頃、安水集落の立神神社着。立神神社は、神川を渡った立神岩の麓に鎮座していたが、昨年（平成二八年一〇月二五日）集落内に移転遷座した。神社には、既に安水集落の人たち五人ほどが集り、たき火を囲んだり、注連縄を編んだりしている。官司と伶人の神職二人は立神神社に入り、注連縄を飾り、立神岩の近くから採ってきた榊の枝に御幣や苧麻をつけてタツガンサー（立神岩の神様が憑依する神柴）を作る。さらに、神殿に安置されている神様（六体の小石）の衣替え（おきんだて。紙で作った衣）を行

う。諸準備が済むと、各家から奉納された焼酎、白米などを供え、タツガンサー神を勧請する祭典が行われる。

神社内の祭典が済むと、社殿の横に作られた一メートル四方の模擬田で、豊作予祝神事の「田打ち」を行う。田打ちの牛役は、以前は子どもが担っていたが、近年は子どもがいないので、今は大人がする。牛役の大人たちが模擬田の周りに立ち、神職の唄にあわせて、木の枝のカギ鋏で、土をかき上げ中央に盛りあげる。田植え歌が終わると、盛り土の砂を周りにいた見物人に投げかける。神職たちは、「田打ち」、「田起こし」、「田ならし」、「苗代田」、「種まき」、「鳥追い」の唄を歌う。一連の農耕予祝神事が済むと、村人こぞの直会となる。直会では、焼酎、酢の物、火で炙った串刺しのさつま揚げ等が振舞われる。

(3) 事始め

立神神社での祭典が済むと、村人は安水自治公民館へ向かう。神職二人は、途中にあるウツガンヤマに立ち寄る。ウツガンヤマ（一月二〇日に先祖祭祀をする杜。集落のウツガン様と四体の荒神様、馬頭観音等が祀られている。）の前にはシラスが盛り、莫塵が敷かれ、白米とお酒の入った瓶箱が用意されている。ショウホイは、神柴の立神様（タツガンサー）をシラス盛砂に立て、白米とお酒を供えて祝詞をあげる。タツガンサーは、外で休まれると言うので、そのままにして公民館に行く。

立神神社の守りをしてきた人物の自宅で「事始め儀礼」を行っていたが、平成一四年から公民館でするようになった。公民館には、集落公民館長、老人会長、婦人、青壮年など四人と神職二人の計六



写真1 針起こし

人が参加。まず、一月二〇日に各戸に配るハナ（半紙を三角に折り曲げ、中に川柳の枝・田打ち神事で使った榊の葉・白米を入れ、柳の根本からぐるぐる巻きにし、麻紐で結わえる。）を作る。このハナは、正月二〇日に各家の先祖棚や床の間に飾るものである。その後、女性の「針起こし」が行われ、御膳が出て「三献サカズキ」となる。この時の吸物には大きな里芋とオヤシ（もやし）が入る（これをイモンコンスイモンと言う）。宴の途中「ナンコハジメ」も行われる。宴が終わると、公民館横の畑で「鍬起こし」をする。



写真2 ナンコ始め



写真3 鍬起こし

事始めの儀礼が終了すると、ウツガンヤマに休まれていたタツガンサーを奉持し、車で旗山神社に帰る。以前（平成八年頃）までは、安水集落の後に、隣りの白井集落にも立ち寄り、宿になっている家（代々祭りの宿は決まっていたが、後年輪番制となる。）で、ナンコ始め、針起こし等を行っていたが、平成八年以降は、途絶えてしまった。

(4) 午後三時、神社に帰着
タツガンサーを神殿の御扉の前に立てて休ませる。宮司宅に行く。

ズシ（雑炊）が出る。宮司は初風呂に入る。

4 一月三日

(1) 若水汲み

午前六時半ごろ、伶人が川南の境の川の上流に行き、若水を汲む。神社に戻り、その若水を鳥居、拝殿の柱、本殿などにかけて浄める。

(2) 柴オコシ

三日に、葉を裏返しにしてあったカンシバを、葉を表にする。これをシバオコシと言う。神柴の力を目覚めさせるのだという。この神柴は拝殿の五柱に括って掛け、各お旅所では交差状に立てて置く。

(3) オノサオ

神殿から四本のオノサオ（王の竿。神王面を付けた杖）を取り出し、拝殿の柱に懸ける。奥の神殿の中には、旗山神社と狩長神社の二社が鎮座しており、それぞれの社にはオノサオ二本ずつが収納されている。旗山神社のオノサオには、阿形と吽形の鼻高面、狩長神社のオノサオには阿形と吽形の大鼻面と銅鏡が懸けられる。オノサオは神聖視されており、神殿の中に収納され、どちらも色紙の御幣に囲まれ、中に仮面や鏡があることは隠されている。旗山神社のオノサオは、拝殿入口の両側に掛けられ、狩長神社のオノサオは、拝殿の柱にヤマンカンシバと並んで掛けられる。狩長神社のオノサオの方が重要視され、シシ狩り神事と三日目の巡行には、狩長神社のオノサオだけが巡行する。拝殿入口に懸けられた旗山神社のオノサオの一本は懸けられたままにしておく。この面は留守番役と言う。

(4) ヤマンカン柴作りや諸準備

伶人が午前中に、椎、ユズリハ、ネズンノメサシ、ツタカズラ、トベラ、クチナシ、タツノハの七種のシバを取ってくる。これを束

ねてシオカズラの葉で結わえ、御幣をかける。神籬である。このヤマカンシバは、ひとまず拝殿の柱に懸けるが、巡行時には奉持する。

「弓矢」作り、「山神」・「餅盗人」作り（半紙に描く）、シシ肉作り（ワラヅトにシトギを入れ、猪の肉だとする。）、シガキ作り（コノサカに行き、シシの潜むヤマを作り、ワラのシシを入れて置く。）等の諸準備は午前中に済ませる。

(5) シシ狩り神事

隣村（半ヶ石）との境にある「コノ坂」まで、ヤマカンシバ、金幣、オノサオ（二本）、タツガンサー柴を掲げてに巡行する。コノ坂の峠で樹木に神柴やオノサオを立て掛け、「半ヶ石山をシキます、奥山スミ、中山スミ、山口スミをシキます。」と、宮司が祝詞をあげる。このシキますというのは、「領有する」というふうな意味で、半ヶ石山の奥山、中山、山口全体の山の神を勧請し、祭祀すると唱えている。その後伶人が、半紙に書いた「餅盗人」の絵に、『悪さをするな。』などと声を掛けながら、足、手、目、鼻、口、局部、頭などに串を突き刺す。これは、悪霊封じの調伏儀礼のようだ。

次にシシ狩りを行う。神官たちが椎の木の枝などを集めて高さ二メートルぐらいの山の形のシカキ（柴垣）を作り、その中に茅で作った長さ二、三〇センチメートルぐらいのシシを入れて置く。これをカリクラと呼ぶ。犬役の子どもたちはカリクラの周りを回りながら、「シシがいるぞ。」「今朝の足跡がある。」等と声をかけながらシシを探し、シシを追いだす真似



写真4 神柴・金幣・オノサオの順に巡行

をする。カリクラの中にあるシシを竹製の弓矢で射り、「獲れた、獲れた」と喜ぶ。その後、少し移動してシシに火をつけ燃やす。これを「シシの毛焼き」と言う。

シシ焼きの後に、二のシバと呼ばれる場所（コノサカを少し下った鳥越の尾筋にあるもう一方の村境）まで行き樹木に、神柴を交差状に立て掛け、さらに奉持してきた金幣、オノサオ、タツガンサー、ヤマカンシバ等と、先ほど獲ったシシ肉（ワラ苞に入ったシトギ）も立て掛ける。

「笹原の狩倉をシキます、山の神は、ここの所に天下りませ、と申す。」と祝詞をあげ、祭りが終わると、シヨーホイ（宮司）がワラ苞に入れてあるシトギを小刀で升目状に切り開く。これを「シシの身開き」という。トーンと叫び声（鉄砲の音だという。）をあげてシトギを頭上に掲げてから食べる。参列者も次々に「トーン」と声をあげてからシトギを頂く。これを「矢開き」という。残りは、近くの木の枝に吊り下げて置く。シヨーホイは「山の神は元に帰りませ。」と祝詞をあげて、交差状に立てた神柴だけを残し、神社まで来た道をまた行列をして帰る。

(6) 神社に帰着

帰着したら、オノサオ、ヤマカンシバは元の柱に結える。金幣は旗山神社の社に入れ、立神様（タツガンサーシバ）は、御戸の前に立てかける。その後神舞の「山の神舞」を奉納する。

5 一月四日

(1) ツツのバ



写真5 シシカリ神事

午前九時半、カンシバ（シバ起こしをした柴）、タツガンサー、金幣、ワラツトのシシ肉を神殿から取り出し、拝殿の柱に結えていたオノサオ、ヤマンカンシバ等も取り外し、並べてから祭典を行う。その後、車にそれらを乗せて、「一のシバ」に行く。以前は、行列を組み、伶人が笛の樂を鳴らしながら巡行していたと言う。「一のシバ」は、道路より少し小高くなっている所にあり、入口には八月十五夜に編んだ萱縄が吊るされている。この場所の木を伐つたりするとサワリがあるという。椎の古木に、カンシバ（二本、交差状に立て掛ける）、金幣、オノサオ、ヤマンカンシバ、シシ肉等を立て掛け、シヨールホイが「狩山シキます、山の神はこの所に天下りませと申す。」と祝詞を唱える。祭典が済むと、交差状に立てた二本のカンシバは残して、次の「二のシバ」に向かう。村境の聖地（お旅所という）で、山の神に領域内の狩猟安全のお祓いをする。『狩山シキます』とは、狩猟領域を確定するということのようにだ。カンシバ（神柴）を立てて置くのは、結界を示しているようだ。

（2）二のシバ

「二のシバ」は、段集落を見下ろす所にある。ここでも「一のシバ」のように、近くの木にヤマンカンシバ、オノサオ、カンシバを立て掛けて祈禱をする。一のシバ、三のシバと違ってここでは、段集落の段氏が祭りに加わる。祭りの後には直会が行われ、段氏が持参した甘酒とナマスを頂く。しかし、平成二八年の祭礼には段氏が高齢化のために来れなくなり、直会もなかった。段家は、修験関係の家で、修験文書が残っているらしい。餅盗人に串を突き刺す仕草は修験者の調伏儀礼のようで「柴祭り」には、村里に定着した里山伏による、修験道文化が入りこんでいるようだ。

（3）三のシバ

「三のシバ」の場所は、大久保集落を見下ろす尾根にある。ここも一のシバで行ったような神事を行う。祝詞は「岩元カクラをシキ

ます、山の神は此処の所に、天下りませと申す。」と唱える。カンシバをそのままにして高尾神社に向かう。

（4）高尾神社

高尾神社は、錦江湾や、開聞岳も一望できるこの辺り一番の高い所にあり、天照大神を祀っている。修験の山で役小角像が建てられている。ここでの祝詞は『海、川をシキます。ジュウオウの神は、この所に天下りませ、と申す。』と唱える。ジュウオウの神とは、龍王の神（水の神）のことであろう。祭典が済むと、前日に二のシバで行ったように、参列者一同がシシ肉食べをする。シヨールホイが切り目を入れたワラ苞のシトギ（シシ肉）を『トーン』と掛け声をかけてから頂く。交差状に立てたカンシバはそのままに置いて、帰路に着く。

（5）旗山神社に帰着

神社に帰着すると、ヤマンカンシバは拝殿の元の柱に結えて、金幣、オノサオは神殿の柱に（旗山神社には金幣と鼻高面のオノサオ。狩長神社には大鼻面のオノサオ）を収め、タツガンサーは旗山神社の御戸の前に立て掛けて置く。神社拝詞を唱えて祭典が終了すると、神舞の「山の神舞」が行われる。その後神社横のシヨールホイ（宮司）宅に移動して、神唄を歌い「種まき始め」を行う、其の後はズシ、スイモン、ナマスなどが出て、酒宴となる。

6 一月二〇日

一月四日以降、そのままにしてい



写真6 「三のシバ」

たタツガンサー、ヤマンカンシバ、カカリシバを神社前の大楠の根本の洞の中に葉を裏返しにして伏せる。これで一連の「柴祭り」は終了となる。

「意義」

日本の「狩猟文化」及び「稲作以前の文化」の残存する貴重な正月行事と位置付けられているこの「柴祭り」は、昭和三四年に小野重朗氏によって二〇例が報告されたが、現在きちんで行われているのはここ旗山神社だけである。旗山神社では、現宮司の父が遺した「神社神事工事」記録ノートや民映研の映像記録、川野和昭氏の調査報告書等があるので、それらを基に現宮司が祭礼をできるだけ元の姿に踏襲することに努めている。当分は安心できるが、徐々に



写真7 神舞「山の神舞」

内容も変化してきているようだ。正月二日の白井集落の事始め行事はもう途絶えてしまった。安水集落の立神神社は集落内に遷座し、子どもがいないので田打ち神事の田起こしは大人が行う。毎年祭りを勤める宿家も個人宅から公民館に変わった。旗山神社でも巡行時の祭礼用具奉持者が足りなくて不便をきたしている。古祭「柴祭り」は、今まさに存続の危機に瀕している。この祭りの意義を地区の方々に理解してもらい、何とか祭りの存続を図ることが必要であろう。

「参考文献」

- ・小野重朗 一九七四 『南九州の柴祭と打植祭の研究』
- ・川野和昭 一九八四 『大隅・大根占の柴祭りとそのシバに関する

一考察』(補説「鹿児島県の歴史と文化」黎明館展示の背景)
(出村 卓三)

2

七島正月

しちとうしょうがつ

〔別 名〕なし

〔伝 承 地〕鹿児島郡十島村各島々

〔実施時期〕旧暦一二月一日から六日・

〔実施場所〕十島村各島々

〔伝承組織〕十島村各島内の集落

〔名称〕

「七島正月」と十島村（トカラ列島）各島々がこの名称で呼ぶ。

〔実施場所〕

十島村内各島々の各家庭で行われる。今回は悪石島を調査したので、悪石島の例を報告する。

〔実施時期〕

旧暦一二月一日から六日まで（口之島は七日まで）が七島正月で、旧暦一月二八日から準備を始める。

〔伝承組織〕

悪石島の例では、組織として伝承しているのではなく、集落内の仏様のある家庭（本家のみ）で行っている。

〔由来・伝承〕

調査地での聞き書き、文献などによると次のような二つの説がある。

一般的に伝えられている由来としては、慶長一（一六〇六）

年島津家久は琉球出征を許され、慶長一四（一六〇九）年琉球出征軍に加わり、正月をひと月繰り上げ一二月に正月を済ませて戦いに



十島村悪石島の集落周辺



七島正月の先祖（オヤダマさま）に供える料理等

出た（水先案内として）ことから七島正月をするようになった。

もう一つは、平家が関係していることで『日本庶民生活史料集成』の中にある「拾島状況録」と『道之島代官記集成』、『名瀬市誌』に掲載されている次のような文がある。

『拾島状況録』に七島正月について「七島ハ往古ヨリ十二月一日ヲ以テ正月ノ儀式ヲ行フ。（中略）陰曆正月ハ唯村民業ヲ休ミ餅ヲ拵へ、親族朋友等相集リ酒宴スルノミニテ祝飾、廻禮等ノ儀式ヲ行フコトナシ。陽曆一月一日モ亦唯業ヲ休ムノミ。故ニ七島ニテ単ニ正月ト云ヘハ十二月一日ノ事ヲ意味ス。其来由ヲ聞クニ、平家来往ノ後孤島ノ生活無卿ニ堪ヘス速ニ正月ノ来ルヲ願フ切ナリ。タマタマ十二月一日ヲ以テ一度正月ノ儀式ヲ執行シタリシガ、爾后例トナリ今ニ傳フト。其真偽ヲ知ラス」

『道之島代官記集成』には「七島正月トテ、平家が七島ニテ大島ヨリ一ヶ月先ガケタルヲ記念センガ為ニ今猶行フ、當笠利字ノミ行フ」とある。

『名瀬市誌』にも「大島本島笠利町大笠利では今から六〇年ほど前まで七島正月と言って、日は違うが一二月二〇日に旧正月以外の正月をやっていた。」また、「昔、十島村まで逃げのびて来た平氏が、正月だけでも源氏より先にしようといって、ひと月早い一二月に正月をやったのがその起こりで、十島村に親戚のあつた人たちが始めたのが村全体に広まった。」とある。

七島正月は仏様の正月、新の正月は神様・人間の正月と言われている。

各島々からお発ちになった先祖様（オヤダマサマという）は一番北にある口之島に集まって、ここから一斉に甌島に向かうと伝えられている。

【実施内容】

七島正月の迎え方、過ごし方、先祖（オヤダマ）送りなどについてみると次のようである。

平成二九年は七島正月と新の正月が重なった年であった。

先祖はカザンシタから上がって家に帰って来るので、前もって道作りをする（藪払いなどをして通り道をきれいにする。）。

1 旧暦一月二八日

先祖（オヤダマサマという）を迎える。

かねて、仏壇（仏様）は内の間にあるので、仏壇から床の間や床の間の前に設えた台の上に位牌、写真などを置く。

床の間の掛け軸など神に係るものは神棚に移動させる。

墓参りを午前中にしてゆずる葉（ゆずり葉）、焼酎、水、線香などを供える。

仏壇から降ろした仏様の前にはお茶、お神酒などを供える。このことを「チャトウ」という。

先祖に供えるごちそうなどの供え物の膳は、自分の家の先祖の分と「ホーケシジョ」と言われる無縁仏の分を一つの膳に同じものを供え一段下に置く。供え物をするときは、自分の先祖よりも先に「ホーケシジョ」の分を供える。その理由は、自分の家の先祖の供え物に手を差し込まないようにとのことである。

2 旧暦一月二九日

先祖の年の晩といわれており、お膳を組む。

午前中墓参りをし、墓に線香、水、焼酎などを供える。仏様には餅を搗いて四個供える。供え物は仏様には偶数個、神様には奇数個供えるように決まっている。

一月二九日または一二月一日から縁側にゴザを敷き、その上にお土産物を入れるテゴ（竹製籠）を置き、この中に毎日お土産を一つずつ入れる。または最初いくつか入れておき、珍しいものや頂き

ものがあつた時などに追加して入れる。中に入れる物もその家庭によりさまざまである。

例えば、テゴの中にツワの葉を敷き、その上に生のカライモ、カッシャ餅、みかん類、ビールなどの飲み物、お菓子などで、その上にツワの葉を被せる。

テゴの上には杖代わりのオウギ（サトウキビ）六本を二つのテゴに長いまま渡して乗せ、タオルをオウギの上から掛けたり、テゴに折って掛けたりする。タオルは手足を洗ったときに拭くためのものだという。

テゴのそばには掛け菜（葉付き・根付き）を五日までは根元を内側に向け、六日のお発ちの日には根元を外に向けて置く。掛け菜は大根、里芋、青菜（菜の花・タカナなど）を供える（写真1・2）。



写真1 テゴと杖がわりのオウギ（サトウキビ）



写真2 竹籠の中のお土産

一二月一日

先祖の元旦

この日から六日まで七島正月で、この日に供えるものがある。それはイモンシユイ（イモンシル）と言ひ、里芋の味噌汁である。そのほか白いご飯（粟のご飯は炊いて供えてもよいが、麦ごはんは供えてはいけないといわれている）、煮しめ、豆腐などで、昔は餅、豆腐はごちそうであった。

午前中、墓参りに行き新たにゆずる葉、線香、焼酎、水などを供える。

一二月二日から五日

自分たちが食べるものと同じものを供える。味噌汁（大根、ニンジンなど）、ご飯、漬物など、昼ご飯はうどんなど何でもよい。毎日三食供える。また、焼酎、お茶、線香、煙草や好物なども供える。

五日の昼ご飯に「生もの」と言つて生米・生粟など、炊いてないものを供える（写真3）。



写真3 供えられた生米、生粟、餅

一二月六日

先祖を送る日（オヤダマサマのお発ちの日）で、「オヤダマまつり」とか「お立ちの日」といい、七島正月の中では一番大きな行事である。

縁側においてある「掛け菜」は根元を外に向ける。

午前中、墓参りをして新しいゆずる葉、水、焼酎、線香などを供える（写真4）。

朝からお発ちの特別な御馳走を作つて供える。新仏（新しい先祖）がいたら三年間は一膳増やし三年後に引く。

御馳走を供えるお膳は仏様用を使う。

A家のお膳は曾祖父の手造りで神様用（高膳）とは別である。

オヤダマサマのお発ちの日の御馳走（お膳）はご飯、ソーメン、煮しめ、白和え、カイノメシで先祖が帰るときにテゴのお土産と一緒に持って帰ってもらう。ホーケシジョの膳にも同じものを供える（写真5）。



写真4 墓に飾られた新正月用のゆき松と供えもの

線香あげ

線香を持参し、身内を回って線香をあげる。総代さんは家々を訪ね線香をあげてから、家の人に「カエヨウ（カロヨ）をあげられましたか。」と聞き、まだ唄っていないければ総代さんが唄う。以前は集落中全戸回って線香あげをしていたが、今は身内だけを回るようになった。



写真5 位牌、写真などと先祖さま（オヤダマサマ）への供え物と右手前は無縁仏用

悪石島では総代（自治会長）さんとガチ（集落の手伝いの人）が各家々を回り「カエヨウ（カロヨ）」を唄う。

「カエヨウ（カロヨ）」の唄い方は、線香をあげた後、ガチが外に出て戸を叩いて仏さんに知らせる。この時「トンビンタカラ イオウテアゲマス（戸の頭から祝ってあげます）」という言葉葉を唱える。唱え言葉が終わると総代さんが次のような「カエヨウ」を唄う。

「カエヨウ」
マツタカキ エダモツラナル ハトノミネ
クモラヌ ミヨハ ヒサカタノ
ツキノカツラノ オトコヤマゲニモ サヤキイケ アゲニキテ
キミバンゼイトイノルナリ
カミニアユミヲ ハコブナリ
カミアユミヲ ハコブナリ
カロヨイマデモ メデタカロヨ（メデタカリケリ）

これは、昔から伝わっている唄で旧暦十一月二十九日ご先祖様の晩に唄詠みする。また、一二月六日唄って先祖様にあげる（写真6・7）。



写真6 線香持参で線香あげに来る



写真7 カエヨウを唄う総代

3 お立ちの儀式

(1) お立ちの儀式の連絡

午後六時半頃になると総代さんから「チャトウ」してください、と放送がある。この放送を合図に各家庭では豆まきを始める。

(2) 豆まき

縁側の戸を少し開ける。縁側の外には先祖の竹杖が立て掛けてある。豆は炒ったものを準備しておく。豆をまき始めると同時にタブの葉を焼きパチパチと音をたてる。以前はタブの葉だけを焼いていたが、今はタブの葉と榊の葉を焼く。この葉は一月一四日に切っておく（写真8・9）。

豆まきのやり方は、御馳走やお供え物をしてあるとそこでその家の代表者と親戚や友人などの二人が、正面と斜め向かい側に立ち豆まきを始める。この時に二人は次のような唱え言葉を言いながら豆をまく。



写真8 マメマキ用の大豆



写真9 マメマキの時、タブの葉を焼く

Aさん 仏さま（供え物）の方に向かって豆をまく。

Bさん ワヤナイ（ニ）カムカ

Aさん ノムジカム

Bさん ワヤナイ（ニ）カムカ

Aさん ノムジカム

Bさん ワヤナイ（ニ）カムカ

Aさん ノムジクイテ クイコロス

二人で 「フクハウチ フクワウチ」と言った後、全員で「エツシ エツシ エツシ」と言いながらお膳やお菓子などの供え物を全部手で触りながら少し動かす。手で触らない物は先祖様（オヤダマサマ）は持つて行かないのですべて触る。

最後にホーケシジョ（無縁仏）に対してBさんが「アトシモノ ナカモンハ コレデ（アトシキノ ナカモンハ コイデモタバテイデクイヤイ）」と言う。

そしてお茶、焼酎を外に捨てる。

豆まきをするときは「フクハウチ フクハウチ」と言う（写真10・11）。



写真10 総代さん宅でのマメマキとお発ちのそらごちをのせてあるお膳用お膳



写真11 供え物等を手でり動かす

（3）オシタマツリ

豆まきがすんだらすぐ供えてあるお膳を下げて（その場でお膳を少しずらして席をつくる。）供え物をいただく。

以前は総代さんの所が船頭さんの家であったので、集落の全員が総代さんの所に集まってオシタマツリをしていたが、現在は各家庭でお発ちの儀式をするのでオシタマツリも各家庭ですませる。現在の総代さんの家がたまたま船頭さんの家であるので、各家庭でオシタマツリをすませた方々（各家の代表者）が総代さんの所に集まる。集落の全家庭が集まると、各家庭でオシタマツリをすませたことがわかるので、総代さんの所で皆先祖様（オヤダマサマ）が舟に乗ったことを確認する。総代さんの所で豆まきがすんだ後、集まった皆でオシタマツリをする（写真12）。



写真12 各家庭でのオシタマツリ

総代さんの家に先祖様（オヤダマサマ）が全員集まって、そこから舟に乗り込んでカザンシタから甑島へ向けて出発する。七島正月の前までに亡くなった人（新仏）は、先祖舟には乗れないので舟にぶら下がつて甑島へ一緒に旅立つ。各島々から六日に旅発つて口之島に行き、七日に口之島から一斉に甑島に向けて旅立つ。

【意義・考察など】

以前は旧暦一二月一日に七島正月、新暦一月一日に新正月、旧暦一月一日に旧正月というふうにならぬ。年三回の正月を行っていた。しかし、現在は七島正月と新正月の二回行っている。七島正月は分家はやらぬ、仏壇のある本家のみで行う。分家や別に居を構えている子どもたちは本家（実家）の仏様参りに来る。

平成二九年のように七島正月と新正月が重なると複雑になるので、暦を確認しながら行事を行わなければならない。

七島正月はお盆と同様に先祖迎えと送りがあり、また、節分のよいうな豆まきという行事も行われる。この豆まきはタブの葉を焼きパチパチと音を立て「フクハウチ フクハウチ」という言葉で送り出す。節分は節替わり、厄払いここでは豆まきはやらないという。

送り出した先祖は舟に乗り甕島へ向かう。下甕島で調査した時に「トカラ列島から魂（御霊）が通ってくる穴が海岸近くにある。太陽の沈む西の方に極楽浄土がある。」という話を聞いた。

このことはトカラ列島と甕島で同様の伝承があることに何らかの意味があると思う。

また、『道之島代官記集成』や『名瀬市誌』にあるように七島正月は奄美大島笠利でも行われていたということは、今後の調査課題である。

【参考文献】

- ・小野重朗 一九九四 『南日本の民俗文化VI 南島の祭り』 第一書房
- ・笹森儀助 一九六六 『日本庶民生活史料集成 第一巻』「拾島状況録」三一書房
- ・名瀬市誌編纂委員会編 一九七三 『名瀬市誌』名瀬市役 所
- ・野見山温編集 一九六九 『道之島代官記集成 福岡大学研究所

3

くまのじんじゃ
熊野神社の鬼火焚きと鬼追い

〔別 名〕 おねつけ焚き・奇習鬼追い祭り

〔伝 承 地〕 曾於市末吉深川

〔実施時期〕 新暦一月七日早朝夜明け前と夜

〔実施場所〕 鬼火焚きは深川集落の空き地

鬼追いは同集落の熊野神社とその周辺の路地

〔伝承組織〕 鬼追い保存会

〔名称〕

「鬼火焚き」の「鬼」は一般に悪霊のこととされる。「おねつけ焚き」の「おねつけ」は鬼火の方言。「鬼追い」は、悪者の鬼を人が追いかけるということだが、実際には福を招く一面も持っている。

なお、「奇習鬼追い祭り」の「奇習」は近年付け加えられたもので、公の広報、神社内の掲示板などにも、そう書かれていて既に定着している。

〔実施場所〕

鬼火焚きは深川集落内の広場で、場所は年によって変わることがある。

鬼追いは熊野神社の境内及び周辺の民家がある道々である。

〔実施時期〕

二つの行事は、今は新暦一月七日に行われるが、鬼火焚きは夜明け前から、日が出る頃まで、鬼追いは通常夜八時頃か



熊野神社周辺



暴れる鬼

ら九時頃まで行われる。日中かなりの時間があるが、豆煎りなどの外来客の接待のほか、近年は末吉町の商店街に出て鬼追いのデモンストラーションがある。また、正式な鬼追いが始まる前に、主催者の行うビンゴゲームや他グループの太鼓演奏や踊りなどが披露される。

「伝承組織」

「鬼追い保存会」があり、深川熊野神社とともに祭り全体を取り仕切る。設立時期は一九七七年頃。

「由来・伝承」

鬼火焚きは、正月の間使ったしめ縄など飾りを燃やすのが一つの目的だが、これは飾り物に取りついた悪鬼を退治するためだと伝承される。また、燃え残りの孟宗竹の破片や、その先についていた枝葉を取ると縁起がよいといわれる。鬼火焚きの火にあたるのも健康に良いと伝えられる。

鬼追いは、往時は同地にあった光明寺が主導して実施していたが、明治の廃仏毀釈で廃寺になり、この行事も中断された。しかし、悪疫流行で牛馬が多く死んだので、深川青壮年の協力のもと神社内での実施となった（後の項に記す『末吉郷土史』参考）。

「実施内容」

鬼火焚きに参加する人たち

保存会の成年、成人と子どもらが参加する。年によって参加人数が異なる。男女、決まりはないが男性が多くなっている。



写真1 熊野神社

鬼火焚きの準備

前日まで、孟宗竹で骨格を組み、集落の人たちが焼くための正月の飾り物などを持ち寄る

その骨格の組み立てだが、近くから取ってきた一〇・五メートルほどの孟宗竹を、上部に枝葉をつけたまま四本立てる。下は浅く掘った穴に入れて固定化させ、かつ下方に正月の飾りなどを積み上げてそれが着火部分となる。そして、それらが倒れないように、また最後にうまく倒すために、竹の上から四本の綱を四方に張って固定させる。

鬼火焚きの順序

参加者は先ず熊野神社に詣り、神官より身を清められる。そして暗い道を列をなして、鬼火焚きの場に行く。

成人が持ち寄られた正月飾りに火をつけていく。火がやがて頂上付近までできたころ、四人の成人が四本の綱を持ち、調整しながら倒していく。

残った竹の先端部の枝葉の部分は、特に縁起物として貴重であり、誰が手に入れたか注目される。他の分は、鋸ぎりで切られ配布されるが、かつては、子どもらが持ち帰って、これでコップを作るなど細工をしたようである。

参加者は、周りが明るくなつた頃、三々五々帰宅する。責任者が火の始末をして終了する。

昼間の催事

鬼火焚き終了と鬼追い開始との間はしばらく時間があるので、実行委員会主催で次のようなイベントが行われる。



写真2 鬼火焚き

「豆煎り」 参詣人に配る大豆を大鍋で煎る仕事がある。熟練を要し、見る人を楽しませる。

「鬼のもてなし」と称し、集落の人たち。他所から鬼追いを見物に来た人たちに、公民館で、そば、おにぎり、煮しめなどを無料でふるまう。家々の主婦が料理し、主に男子がホスト役となる。

「商店街パレード」。集落を出て末吉町の商店街をパレードを行う。

「鬼追い前の余興」。ビンゴゲームや、地元グループのひよっこ踊り、鬼太鼓などが披露される。

鬼追いの参加者と装束

鬼役は三人一組になって動き回るが、黒装束で白足袋を履き、中心となる一人が大量の御幣を竹籠のようなものに付けてそれを被る。その年の数え年二五歳の厄男が担う決まりがある。これに、彼らを護衛する二人の男性が加わる。鬼側は「鬼の手」といわれる棍棒を持って防衛する。建前上、だれが鬼役をするかについては秘密である。

一般見物人は参詣者として誰でも鬼を追い、鬼が被る御幣をむし



写真3 豆を煎る様子



写真4 鬼

り取ることができると、実際には鬼が派手に暴れまわるので、屈強な青年たちが主となる。また男性の声により、神社境内のスピーカーから祭りの解説がなされるが、雰囲気盛り上げるに一定の効果を持っている。

鬼追いの実際

午後八時頃、鬼が潜む「鬼小屋」と言われるところから、突如鬼たちが飛び出し、神社の境内から階段を下りて、道路を挟んで今か今かと待ちわびている大勢の見物人の中に現れる。そのあと、鬼が身に着けた御幣を取ろうと追ってくる人がいる。やがて激しい攻防が始まるので、多くの見物人は危険を避け、たまたま傍に来た鬼から御幣を剥ぎ取るしかない。

鬼たちは防御のために「鬼の手」と言われる棍棒を持っている。御幣を取ろうとすれば、当然それに打たれることが予想される。だが、それに打たれて頭にコブがでると、それは縁起がいいのだとも伝わっていて、人々は鬼が単なる悪霊ではなく、福をもたらす存在であることも知っている。

また、祭りと言えば、形式化された儀礼をイメージする場が多いが、この鬼追いの実際は、形式的なものとは遠く、真剣勝負に他ならない。けが人も出る場合があるので、観客は緊張もする。

こうして鬼たちは、一時間ほど暴れまわったあけく、再び鬼小屋に戻っていく。その後、神社で参詣人は昼間に炒らされた豆を貰うことができる。

「意義」

かつて近隣の集落では、「鬼火焚き」の場に鬼が出てきて、集落の一般の人たちとの間で追われ、追うことが行われていたよ



写真5 神社から出てくる鬼たち

うである。それに対し、現行の熊野神社の鬼追いは、鬼火焚きとは独立して規模が大きく、かつ進化した感がある。近年はテレビ番組などで紹介されて、鹿児島市など他所の人たちも見物に訪れるようになった。これからかかる祭りや行事を行政等がどうか活用していくか、一つのモデルとも言える。

〔参考文献〕

- ・末吉郷土歴史編纂委員会 二〇一〇 『末吉郷土史』曾於市教育委員会
- ・下野敏見 二〇一三 『南日本の民俗文化誌六 南日本の民俗芸能誌全編編』南方新社

(小川 孝夫)

※冒頭の写真及び写真5は曾於市教育委員会提供

4 ダセチツ (出せ突き)

〔別 名〕ダセ・ダセンボー

〔伝 承 地〕指宿市山川利永

〔実施時期〕毎年一月一四日

〔実施場所〕利永区

〔伝承組織〕利永区

〔名称〕

小正月に子どもたちが新婚家庭を祝福して回るハラメウチ習俗の一つで、利永では「ダセチツ」と呼ばれる。出せ突きの転訛と思われる。子どもたちが棒を突きながら出せ出せと唱えることから、単に「ダセ」、あるいは祝い棒の名称から行事名を「ダセンボー（出せ棒）」と呼ぶこともある。

〔実施場所〕

現在は利永公民館（利永集落センター）に集合し、利永区の新婚家庭を回る（二〇一七年は八軒）。回るコースは特に決まっていない。かつては、集落ごとに子ども組のカシラ（頭）が決めた場所に集まって、各新婚家庭を回っていた（利永区は、かつて七集落に分かれていた。今は集落再編で六集落）。

回る家は昨年の新婚家庭だが、実家が利永で外に出ている家庭にも、実家を訪れて祝福する。

〔実施時期〕

日には、昔から一月一四日で、現在も土日に関係なく、毎年この日に実施している。学校がある日は、下校後、日没頃から回っている。かつては日没後に回っていた。実見した二〇一七年は、一四日が土曜日に当たったので、午後二時に公民館に集合して、夕方まで回った。



図1 利永地区地図



写真1 公民館に集合した子どもたち



写真2 ダセチツ

「伝承組織」

現在は、利永地区全体の子ども会行事で、PTAや保護者も協力して、実施している。二〇一七年の参加者は、男子小学生一二人・女子小学生七人・幼児六人。

かつては各集落ごとに、男子だけで回っていた。小学校六年生が子どものカシラ（そこから上は二才〇青年）。今は子どもが少なくなつたので、校区全体の行「伝承組織」

現在は、利永区全体の子ども会行事で、PTAや保護者も協力して、実施して事として、女子や幼児も参加するようになったと言う。

「由来伝承」

「子だくさんになりますよ」という意味」と伝えられている。

「実施内容」

1 ダセ棒（祝い棒）づくり

子どもが持つ祝い棒を、「ダセ棒」と呼ぶ。葉っぱが落ちる木が良いとい、タラ、センダン、カシなどを削って、年明けか年末に親が作ってやった。ダセチツまで、床の間に飾って置いたりもした。

実測したもの三本は、長さ五三センチメートル、七〇センチメートル、八二センチメートル。直径は五センチメートル程度の円柱棒状。他に幼児が持つ長さ四〇センチメートルほどのものもあった。大きさは「引きずらない程度で、腰から足元までの長さにしてはいる。」と言う。太さは「子どもが握りやすい太さ」だと言う。

ダセ棒に描く模様は自分のものか区別できるように描いた目印で、特に決まっていないう（実見の範囲内では左巻きの模様は確認できなかった。亀甲の帯を上部と下部の二か所に描いたものなどマジックで描かれている）。この模様と、名前や生年月日を書いている。ダセ棒は男根に見立てているとも言う。

ダセ棒は、ダセチツが終わると、しまっておく。飾っておく家もあった。翌年も使うこともあれば、新しいものを作ってもらったこともあ

つたと言う。

2 ダセチツの実施内容

実見した二〇一七年は、公民館に集まると、まず仕上げの練習があった。その後、公民館を出発し、一列に並んで唱え言を歌いながら、新婚家庭に向かう。

新婚の家に着くと、子どもたちは庭に輪になり、「ダーセン、ダーセン（出せ出せ）・・・」と合唱しながら、ダセ棒で庭を突く。六回ほど繰り返す。突き方は昔から同様で、場所も新婚さんの家の庭だけで突き、垣根をたたいたり、辻々で叩いたりすることはなかった。

終わると、祝福された新婚さんから菓子がるまわれる。子どもたちは持参した袋に入れて持ち帰る。何軒か回っていくうちに、袋はいっぱいになる。今は、指宿市指定の黄色いゴミ袋を使う。

かつては、迎える家では、ヨッグンのゴツソ（四つ組の御馳走）といて、煮豆・煮しめ・フワフワ・ソバキイが出るところもあったという。フワフワは豆腐などの油炒め、ソバキイは蕎麦のこと。

また昔は、子ども組のカシラだけ家に上げてもらい、御馳走をもらった。下の子どもたちは、庭でお菓子ももらった。現在は全員、庭でお菓子ももらう。

各世帯での祝福が終わると公民館に戻る。

3 ダセチツの唱え言

ダセチツでは、次の唱え言を歌う。伝承者によれば集落ごとでしていた頃も、同じように唱えていたと思われるとのこと。

「ダーセン、ケボボ、

ケボボガ、ツギナツタ、

シータラベガ、ポーロポロー

ハナヨメゾハ、イッド、ニッド、ハズズンナ」

利永では現在、次のように解されている。「出せだせ、いっぱい満ちた、下童がわんさわんさ、花嫁女は一度二度出てくるな。」

【意義】

利永のダセチツは、小正月の夕方行われるハラメウチ習俗の一つで、構造は次のようになっている。

- ① 子どもたちが前年の新婚家庭を訪問し、
- ② 「出せ出せ」と唱えながらダセ棒で庭を突いて祝福し、
- ③ 新婚家庭から菓子などをふるまわれる。

小野重朗は、南九州におけるハラメウチ系習俗を、カセダウチ系習俗とともに、小正月の訪問神事ととらえている（小野一九九六 八三ページ）。そして、この二つを対比して、次のように指摘している。「カセダウチは青年・大人が変装し、家々に贈るものをもって訪れるのに対して、ハラメウチは子どもたちが、変装しないで来訪し持つものは祝い棒で、これで叩くことに重点がある。」（同八二―八三ページ）。

利永のダセチツでは、嫁を叩くことはせず、庭を突いて回る。「出せだせ」の意味は、振舞いの菓子を出せともとらえられるが、新婚のお嫁さんと呼び出そうと唱えているようにも思える。

小野重朗は、利永のように嫁叩きをせず、土地を掘る習俗がみられる点について分布構造から検討し、ハラメウチの目的が「古くは土地を突き掘る」もので、「一年の農耕の始まりの儀礼」ととらえている（同八七ページ）。そして、その意味が忘れられるにつれ、「いわば副次的であった嫁女を孕ます行事が表面に押し出された」とし、南九州の行事や講で花嫁の来た家を宿とする事例がしばしばみられることから、「来訪神を歓待するのが花嫁の任務」であり、「ヨメジヨダツシヤイ、嫁ジヨヲ出ツシヤイ」もその一例と述べる（同八八ページ）。

また、鹿児島市谷山などで見られた小正月の垣打ち習俗も、土を突き開いて農耕が始まるように、垣を打ち破って家々の新年の生活の始まりを示すものとしている（同八九ページ）。そして、ハラメウチは小

正月の来訪神が集落を訪れて「花嫁の歓待をうけ、閉ざし固められた土を掘り棒的な祝い棒で打ち起こし、農耕を始めるための儀礼」とまとめられている（同八九ページ）。

ダセチツの唱え言は、伝えられている解釈よりもより性的な内容を持つているようにも思われる。一方、小野の考える農耕儀礼としての位置づけは、この事例だけでは明らかにできない。

しかしながら、嫁を叩くことなく、庭を掘り返すという習俗の実態から、小正月の来訪神が集落を訪れ、花嫁の歓待を受けて、新年の始まりを示すという要素を、今に伝えている貴重な習俗として意義付けることができる。

【参考文献】

小野重朗 一九九六 『南日本の民俗文化 IX 増補農耕儀礼の研究』 第一書房

（井上 賢一）



写真3 行列を作って新婚家庭へ



写真4 庭でのダセチッ



写真5 庭を突く子どもたち



写真6 お菓子の振舞いを受ける

5

モグラ打ち

〔別 名〕 なし

〔伝承地〕 鹿児島県内北部の一部地域

〔実施時期〕 一月一四日（小正月前日）

〔実施場所〕 伝承地集落内（報告書は伊佐市）

〔伝承組織〕 各集落内の子ども会・自治会

〔名称〕

モグラ打ちは、小正月前日に行われる小正月行事の一つである。

小正月には「モグラ打ち」のほか「メ（繭）の餅」、「ホダレヒキ・ホダレシユイ」、「ハラメウチ」などが行われ、その中の「モグラ打ち」だけが特別に行われるのではなく、ほかの行事も小正月前日に行われる重要な行事であるので、調査した範囲でほかの行事も紹介する。

〔伝承地・実施場所〕

「モグラ打ち」は鹿児島県伊佐市大口、旧薩摩郡（旧川内市を除く薩摩川内市及びさつま町）のほぼ全域、始良市の一部、曾於市の財部、末吉に伝承されていたが、現在はほとんどの地域で行われていない。

今回、「モグラ打ち」は伊佐市大口堂崎集落で調査した。堂崎は集落が広く一日で集落内を回るのは無理なため、集落を半分に分けて二年に一回ずつ集落を回るようにしている。そのため、今年行われた半分の地域を調査したのでこの地域での様子を報告する。

「メ（繭）の餅」、「ホダレシユイ」は原田集落の一家庭、「ハラメウチ」は下ノ木場集落で調査したのでこれらを行事ごとに報告する。



伊佐市大口堂崎集落周辺



モグラ打ち

「伝承・由来」

小正月が現在でも盛んに行われている地域の一つである、伊佐市大口地域のいくつかの集落で行われている行事があり、それぞれの行事に伝承・由来がある。

1 モグラ打ち

以前は主として男子の行事であったが、現在、少子化により集落内の男子だけでは行事が成立しないため、女子も参加して行事を伝承している。

モグラ打ちというのは、新しい年の農耕を控えて、おめでたい小正月にホテという道具を用いて地を打ち、大地の精霊を呼び覚まし、また、豊作に害を及ぼすモグラを追い払うというところからきている。

2 メ(繭)の餅

赤・白・黄・緑など色のついた小さな丸餅や角餅を、柳や榎の枝などにいっぱい飾り農作物の豊作を願う。白餅は稲(米)を表し、黄色は粟を表している。

飾る場所は床の間、仏壇、納戸、内神、井戸、大黒様、大黒柱、オカマさあ、墓など様々な場所である。オカマさあには大きく四角に切った餅三個・五個と

奇数個を飾る慣わしで、この餅は一八日には下げるといふ。また、納戸の餅も一八日には下げると伝えられている地域がある。

メの餅のメというのは、蚕の繭のことで養蚕を行っていた頃、養蚕が盛んであるようにとの願いが込められているとも言われている。現在、養蚕は行われていない。



写真1 ホダレシユイ

3 ホダレヒキとホダレシユイ(ホダレヒキのごちそう)

この行事は「ホダレヒキ」を作ることと「ホダレシユイ(ホダレフツともいう)」を作ることの二つをする。

ホダレヒキ作りとは稲ワラや茅をカユで濡らし、稲粃をつけて稲が穂を垂れている様子を表現している。床の間などに飾る。

ホダレシユイは畑から引いてきたばかりの大根、ニンジン、菜っ葉、ニンニク、ねぎ、ゴボウ、里芋などの野菜をなるべく包丁を入れないで長いまま大きな鍋で煮る。この野菜の上にイワシを一匹のまま家族の人数分乗せて煮込む料理のことである(写真1)。

包丁をなるべく使わないのは、長く稲穂が垂れるように、野菜類が豊作に育つようにとの願いが込められている。

この料理を食べる箸は柳の太い枝でケズリカケを作ったもので食べ、食べた後の箸を子供たちは背伸びしてやっと届く所に置き、翌

日の朝、起きてこの箸を取ると背伸びしなくてもすぐ取れると言われ、子どもたちの成長を願った。

また、食べた後すぐ水を飲むと田んぼの水口が落ちる、と言われているのですぐには飲まなかったと言う。

このホダレシユイは「牛馬の年トイ」とも言い、牛馬をたくさん飼っていた頃は牛馬にも食べさせた。しかし、牛馬を飼うことがほとんどなくなつた現在は「牛馬の年トイ」と言う言葉は、ほとんど

忘れ去られようとしている。

4 ハラメウチ

その年に結婚した新婚を祝い、子宝を願う行事で、モグラ打ちで各家庭を回るとき、新婚の家ではモグラ打ちではなく、ハラメウチを行った。ハラメウチのときはハラメ棒というケズリカケの棒を持って祝う。

〔実施内容〕

1 モグラ打ち

(1) モグラ打ちで使うホテ作り

持ちやすい太さの竹(唐竹)を約一メートルから一・五メートルの長さに切り、きれいにスグッタ(粗ワラを取り除いた)。ワラを一握り位手に取り中心をひとまために括り片方に戻し、中心に竹を差し込みずれないように縄で絞めていく。竹とワラをしつかりと留め、振り下ろしても竹とワラが外れないように縄をきつく巻く。ワラの部分を五〇センチメートル位縄で巻き締めるとできあがる(写真2)。

持つ部分が竹ではなく、ワラだけで作ったホテもある(写真3)。以前はこのホテが主だったと言う。



写真2 ホテ



写真3 ホテの使い方

作り方は手で持つ部分をワラと縄で三つ編みに二つ編み、ある程度の長さまで編み持ち手とする。この持ち手の部分を持って打つ(写真3)。その後、二つを一つにまとめながら地面に打ちつける部分を縄でグルグル巻きながら作っていく。この時もワラを縄でしつかり締めなければ地面を叩くうちに中のワラが出てきてバラバラになる。全体が出来上がったら余計なワラの出ている



写真4 ホテ作り

る部分を切り揃え仕上げをする。

このホテ作りは集落の年配者の指導を受けながら子供たちや集落の方々が協力して行う(写真4)。

(2) 集落内の各家庭を回る

この集落は戸数が多いが二つに分けて一年おきに各家庭を回るようになっていく。

まず、公民館で一度唱え言葉を言いながら実演し、最初の家に行く。集落内の各家庭を回るときは、子どもたちと子ども会の役員、自治会の役員の方々と、各家庭に着いたら子ども代表

が玄関先で大きな声で「モグラ打ちに来ました。」とあいさつし、玄関前で「モグラウチャ トガナシ モグランピンタツツガレ」と大声で三回言う。子どもたちが終わると家の方が出てきてお礼を言い、お祝儀やお菓子類を子どもたちの代表者に渡す。貰った子どもたちは大声でお礼を言い、大人が持っている大きな袋に入れる。

この動作を繰り返しながら集落内の各家庭を回る(写真5)。今年には三〇軒だったので一時間半位かけて回った。

公民館の庭で最後のモグラ打ちを終えたら参加者全員で夕食をとる。

2 ハラメウチ

写真6のようなハラメ棒を持って行うが、この集落ではモグラ打ちの棒で行った。以前は、この集落もハラメ棒を持って行ったのであるが、毎年新婚の夫婦がいるということではなく、もし、新



写真6 ハラメ棒と匏



写真5 モグラ打ち

婚の夫婦がいても頼まれないとできないので、いつの間にかハラメ棒を作ることが廃れてしまったようである。今回、同じ大口の違う集落で五年ほど前にハラメウチが行われその時に作ったハラメ棒を調査する事ができた。ハラメ棒の全体の長さ四八センチメートル、直径三・五センチメートルで桑の木で作ってある。このハラメ棒を作る鉋は特別に専用でつくってもらった物である。全体の長さ約五二センチメートル、刃の部分幅約三・五センチメートル、長さ二九センチメートルである。

3 メ(繭)の餅

床の間の前に天井まで届きそうな立派なメの餅で(写真7)、土台の靱俵の俵も自分で編み、中には靱がずっしりが入っている。

餅を飾ってある榎は山から切り出し、ていねいに枝の不要なものを削り取り、餅を突き刺しやすく小さな枝まで手



写真7 メの餅

入れしてある。餅の黄色は昭和五七年頃までは粟を作っていたので粟を搗いていたが、その後は食紅で、緑もヨモギを摘んで作っていたが、やはり昭和五七年頃から食紅に変わったとのことである。

このような大きなメの餅をつくには一日がかりで、親子孫の三代の手作業で作る。もち米は三〇升つき小さく丸め、榎に挿すと言う大変な作業で出来上がった伝統ある小正月飾りである。

「参考文献」

- ・大口市 一九八一 『大口市郷土誌』 大口市発行
- ・小野重朗 一九七八 『鹿兒島歳時十二月』 西日本新聞社

(牧島 知子)

6 知名町瀬利覚の墓正月

ちなちようせりかく はかしようがつ

〔別 名〕十六日(じゅうろくにち)

〔伝 承 地〕大島郡知名町瀬利覚

〔実施時期〕新暦一月一六日

〔実施場所〕各戸の墓所の区画内

〔伝承組織〕なし

〔名称〕

「墓正月」とは、いつもは墓にいる親や祖先に、墓で正月をさせるところからついた名称。行われる日時から、方言で「十六日(じゅうろくにち)」と言うこともある。

〔実施場所〕

瀬利覚集落の共同墓地、および個人墓地のそれぞれ。多くがサンゴの石垣で囲まれていて、一族が集まって宴会ができるくらいに広い。

〔実施時期〕

新暦一月一六日、午後四時頃から日没時にかけて実施する。

〔伝承組織〕

それぞれの家族、一族が行う行事であるが、墓所においての交流は頻繁にあり、また、小中高校が児童生徒らの参加を考慮することもあある。そのため地域組織と全く無縁の行事とも言えない。



瀬利覚集落周辺



墓前での宴会

「由来・伝承」

正月の間は霊を家にお供していたので、この日に墓に戻し、その場で改めて霊と一族とが一緒に正月を祝う、と伝えられる。

なお、奄美、沖縄全域に、祖先供養の習慣が根強く浸透していて、いろいろな行事に墓参を行う習慣がある。

「行事の準備など」

お盆と同様、正月前にも墓から祖先の霊を家に迎え、正月を共に過ごすと言われ、一六日は、いわばその霊が墓に戻る日であり、今度は亡き祖先を主体に正月を祝う、と言う考えである。

墓正月を実際に行う前は、各家の墓掃除と、墓に持っていく料理を作ることである。料理は本土風の精進料理とは全く関係なく、魚、肉類も使われる。ただ欠かせないものは田芋の餅を作ってお供えすることである。

なお、多くの家庭は本土の仏教とは関係なくこの行事を実修してきた。

「行事の実施内容」

実施内容は決して複雑なものではなく、墓を守る一族の人たちが集い、一同で祈ったあとに宴席を持つことである。瀬利覚



写真1 墓前の供え物

集落に生まれながら、仕事や学業のために他所に出た、いわば出郷者は多いが、この日のために帰省する人も多いと言う。

その宴席は、正に祝いといった雰囲気、湿っぽさはほとんど見当たらない。亡き人の思い出を語り合ったり、それぞれの近況を話し合う、一般的な宴会とほとんど変わらない。

近年はこの行事に子どもが参加できるようなり、小中学校の学校も考慮するようになった。まる一日休むわけにはいかないが、時間内だけ参加の時間を許可するようである。

地域の職場も、昔からこの行事の出席者には寛大な措置をした。

なお、この一年間に亡くなった人がいる家族では、「ミーシヨーガチ」（新しい正月の意）と言い、より盛大に行う。

「他地域の類似行事」

「墓正月」は知名町はもとより、沖永良部島全域に、かつては瀬利覚とほとんど同じような形で残っていた。しかし、今は、墓、または墓の近くでこれほど盛んに行われているのは、知名町では田皆集落、和泊町では国頭集落のようである。

このうち、田皆では午前中に行われる他は、瀬利覚とほとんど変わらないが、国頭のはまったくと言ってよいほど形態



写真2 墓前での宴会（田皆集落）

が変わってしまった。

この日個々人が、墓参りをするのは確かだが、墓に集って宴会を開く形ではなく、集落の主催する会場に人々が集い、そこで特に去年の一月一六日以降亡くなった人たちを追悼するのである。同地では「墓正月（合同慰霊祭）」として告知していることから分かる。参加者はほとんど黒のスーツを着て集会所に集まり、正に葬儀か、追悼式の雰囲気である。正月を先祖とともに祝おうという雰囲気はあまりない。式次第もはっきり決まっただけで、生前の個人をしのぶ形になっている。では、他の集落では全く墓正月行事が消滅してしまったのかと言えそうではなく、墓参りの後に一族が家に集って墓正月を行うのである。行事の場が墓から、家が変わっただけだと言うこともできる。

ここで、正月以外に、墓での宴会はないのかを調べると、お盆の送りの日（新暦八月一日）にも、墓前での宴会があることが分かった。

そのほか、沖永良部では宴会ではないが、「三十三年忌」の祭りの折に、墓前で踊りが踊られることはよく知られている。奄美、沖繩の他の島々にも類似行事は残っている。



写真3 国頭の墓正月

奄美の喜界島のいくつかの集落では、今はほとんど廃れたが、旧暦一月の「柴差し」と旧暦九月の「高祖祭」に墓前で一族が酒宴をする習慣があった。

また、徳之島の井之川に今も残る「一六日節句」という祭りは「祖先の正月」とも言われ、正月一六日に墓で宴を開く。名称と言いつつ、日時と言いつつ、沖永良部の墓正月と極めて近い関係が認められる。

沖繩の旧暦三月にやって来る清明祭の墓所での宴会は、今や南島で最も有名な行事となっている。

「意義」

この行事を担うものにとつて、祖先崇拜は理念ではなく、自然な実感であるという事は明らかである。

なお、今は、沖永良部でも一〇〇パーセント近く火葬で、墓にはその骨が祀られることになるが、かつては言うまでもなくほとんどが土葬であった。人々の意識では、この墓所には骨だけだと思いと、遺体が地下に横たわっているという思いとでは雲泥の違いがありそうである。土葬の時代の墓正月を経験した人は、「今より祖先との一体感は深かったし、何か祖先に守られている感じがした。」と言う。

奄美、沖繩だけでなく、我が国に根強い祖先崇拜思想を考えるのに重要な行事であるとも言えよう。

なお、沖永良部の墓正月の伝承状況を考えるとき、本土の影響のもと同島にも起こった「新生活運動」の影響を考える必要がある。この運動が目標としたのは、人々の付き合いを中心とした日常生活を、できるだけ簡素にして個々の金銭的負担を少なくしようというものであった。例えば、成人式に女性が振袖

を着ていく贅沢はやめよう、というのもそうであった。
その当否は別として、祭りや行事の側からすれば、贅沢な部分
がかなりあってそれまでの伝統が排除されることにもなっ
た。そのことについても、特に土地の人たちは、今後をどうす
るか考えるべきであろう。墓正月は、その格好の材料とも言え
る。

〔参考文献〕

- ・ 知名町史編纂委員会編 一九八二 『知名町誌』 知名町
- ・ 和泊町誌編纂委員会編 一九八四 『和泊町誌』 和泊町
- ・ 朝戸武勝 二〇〇八 「墓正月―先祖崇拝が島の心」 沖永良
部島100の素顔編『沖永良部一〇〇の素顔』 東京農業大
学出版会

(小川 学夫)

※写真2は知名町教育委員会提供

7 利永のメンドンとしなが

- 〔別 名〕 ワアツメイ（いたずら参り）
- 〔伝 承 地〕 指宿市山川利永
- 〔実施時期〕 毎年一月第三日曜日
- 〔実施場所〕 利永区
- 〔伝承組織〕 利永区

〔名称〕

鬼やひよつとこなど様々な仮面を被る二才衆（青年）のことを、「メンドン（面殿）」と言う。このメンドンを露払いに伴う伊勢講御輿（オドド）の神幸行列のことを、「オドドナオイ（御輿直り）」又は「メンドン回り」と呼ぶ。そして、この行事全体の総称を「メンドン祭り」又は単に「メンドン」と呼ぶ。

メendonは神幸の道中、集落民にヘグロ（鍋墨）を塗って歓待することから、行事全体の別称として、方言でいたずら参りを表す「ワヤクメイ」、「ワアツメイ」と呼ばれることもある。本来は伊勢講宿移り習俗であるが、今では「オイセコウ」などと呼ばれることはない。

〔実施場所〕

指宿市山川利永区には、かつては六組の伊勢講があったが、現在は全て、利永区全体の鎮守である利永神社（祭神大国主命・保食命）に合祀されている。

現在の祭礼は、まず、利永神社例大祭として神事が執り行われる。その後、利永公民館（利永集落センター）へ伊勢講木祠を移し、そこからメンドンを伴って、利永区内を回る（メンドン回り）。最後に、利永公民館に戻って直会を行う。

小野重朗の報告によれば、六つの伊勢講組は、正・五・九月の一六



図1 現在のオドド直り（メンドン周り）の経路



写真1 利永のメンドン



写真2 ヘグロを塗られる

日に組別に行われ、エシヨという宿から次の宿へのミコシ送りで、ワヤクメイ（いたずら参り）が行われたと言う〔小野一九九三 二五五ページ〕。

〔実施時期〕

かつては、旧暦一月一六日、伊勢講木祠を神社に返した夕方に行われていた。その後、新暦一月一六日になり、平成二〇年からは、氏子が集まりやすい新暦一月第三日曜日に行われている。午後三時頃から利永神社神事、午後四時頃から約一時間かけて地区内を回る。なお、利永神社例大祭は、本来一月一五日であるが、メンドン祭りと同じく新暦一月第三日曜日に執り行われている。

〔伝承組織〕

現在は、利永区の行事として行われている。かつては各集落ごとに伊勢講組があった。利永区内各集落（市山上・市山下・寺・中・東下・東上。かつては市山東もあつたが集落再編により現在は六集落）の集落長が、御輿を担ぎ中心的な役割をする。直会の準備は区の女性部（各集落二人ずつ、計一二人）が行う。



写真3 利永神社



写真4 神社本殿に合祀された伊勢講木祠

〔由来伝承〕

伊勢代参講に由来し、今でも「昔、疱瘡が流行って、代表がお伊勢参りに行って、御札をもらって来たのが始まり。」と伝えられている。「お面を被っている二才には神が宿る。」とも言う。また、メンドンにへグロを顔に塗ってもらうと、一年間病気をしないと云う。

〔実施内容〕

1 御輿・道具類・供物等の準備

利永神社本殿には、中央に利永神社祭神の木祠が祭られ、その左右に六つの中型木祠と小型木祠が二つ（祭神不詳）が祭られている。六つの中型木祠は、かつて集落ごとに祭られていた伊勢講のものと思われる。木祠の横側に「寺村」などと大きく刻んでいた伊勢講のものと思われ、木祠につけられたものだろう。実測した中型木祠は、幅・奥行き・高さが、①六二×四七×五八・五センチメートル、②五五×四二×六〇センチメートル、③五三×四九×五九・五センチメートル。中には石と大麻が祀られている（写真4）。

伊勢講神幸行列（オドド直り・メンドン回り）に使う道具は、この木祠を乗せて御輿として運ぶ木台のほか、先導する御幣、太鼓、鉦がある。ほかに、御輿の後ろでご飯（オドド飯）や神酒（焼酎）をふるまうが、その道具には、盆・どんぶり・箸、徳利（カラカラ）・猪口がある。

御幣は長さ六三センチメートル。太鼓は直径四八センチメートル、厚さ三六センチメートルで、昭和四四年に寄進されたもの。太鼓の枠は柔らかいタラの木で、長さ三三センチメートル、直径二・五センチメートル。太鼓の担い棒はマダケ製で、長さ一五四センチメートル、直径五センチメートル。鉦は直径一六センチメートル、厚さ五センチ



写真5 メンドンの歓待を受ける子ども



写真6 ヘグロ塗り用の大根

メートル。鉦は柄三〇センチメートル、頭部九センチメートルの金錠で打つ。オドド飯は五キログラム炊いてふるまわれる。

メンドンの着物や面は、公民館でも備え付けているが、自前のものを身に着ける者もいる。面は鬼やひよつとこなど手作りのものや、余興などで使う市販プラスチック製のものなど様々。

メンドンは大根に付けたヘグロを参拝者に塗って歓待するが、その大根は長さは約二〇センチメートル。箆（直径五五センチメートル）に、包丁（長さ二七センチメートル）で切った大根を入れて、公民館に準備しておく。また、ヘグロはバケツ（高さ三一センチメートル、直径二〇センチメートル）に準備しておき、ビニール袋に小分けして、メンドンに持たせる。ヘグロはどこの家のものでもよいが、今では利永区に二、三軒しか煙突のある家がないと言う。

2 神事

午後三時ごろから、牧間神社神職により神事が執り行われる。区役員、来賓約一五人が参加し、時間は約三〇分。神事の名称は、「利永神社例大祭」。神職による拝礼・修祓・献饌・祝詞、集落役員・来賓

による玉串奉奠と続き、参拝者に神酒のふるまいが行われる。

神事が終了すると、六つの伊勢講中型木祠から一つを選び（どれを使うかは特に決まっていない。近年は手前にあり、運び出しやすいものを使う）、本殿から拝殿へ集落長二人で出す。拝殿の入口で、台座（平成九年寄進）に載せて御輿状にし、四人の集落長が担いで、公民館まで運ぶ。公民館の駐車場には、「メンドンまつり」の横断幕が掲げられている。

公民館が御旅所になり、伊勢講木祠はステージに据えられて、集落役員が賽銭を供えて参拝する。

3 伊勢講の神幸（オドド直り・メンドン回り）

午後四時頃、公民館を出発。防災行政無線のスピーカーから「ただいまより公民館からメンドンが発発します。」と放送される。

神幸行列は、「メンドンまつり」の桃太郎旗（一人）を先頭に、太鼓持ち（二人）、鉦（二人）、御輿（四人）、オドド飯（一人）、お神酒（一人）と続く。メンドンはその前後で観客を歓待する。

神幸のコースは、現在は公民館から県道大山開聞線を西に進み、利永保育所前の交差点を北上、市山上集落を時計回りに進む。南下して県道の南側にあたる市山下集落から寺集落、東下集落を回る。県道を再びわたって北上し、東上集落へ向かい、最後に南下して中集落を経て、公民館に戻る（図1）。

道中では各所で、集落民がオドド（御輿）に賽銭を供え、その御輿の下をくぐり、オドド飯と神酒のふるまいを受ける。メンドンは御輿をくぐって参拝者が出てくるところを待ち構え、大根に付けたヘグロを塗って歓待する。今は二〇人ほどの青年（消防団員など）がメンドンに扮している（図2）。

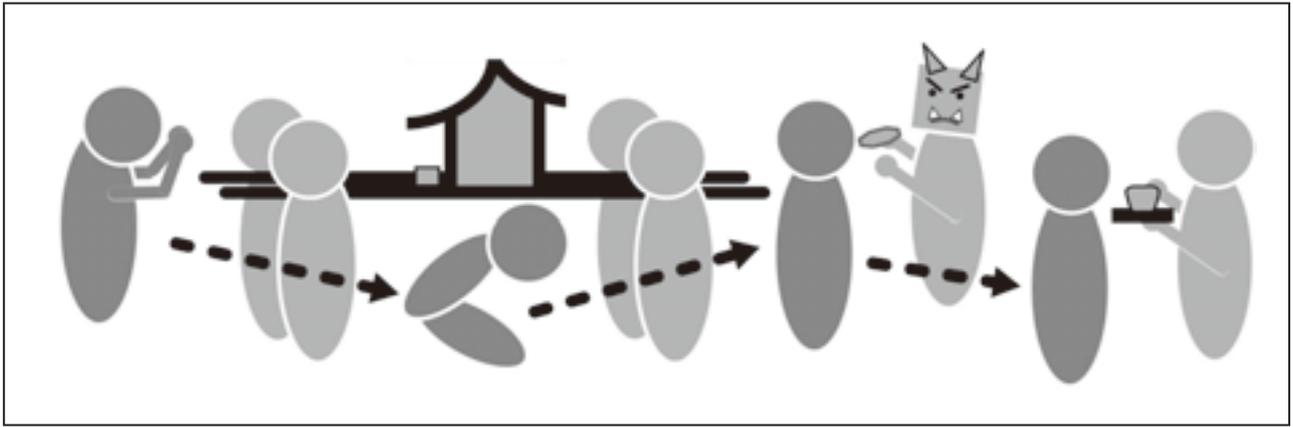


図2 オドドくぐり（参拝→オドドくぐり→メンドンの歓待→オドド飯）。



写真10 メンドン回り道中での参拝



写真7 利永神社を出発する伊勢講木祠



写真11 オドドくぐり



写真8 公民館での参拝



写真12 オドド飯



写真9 神幸（メンドン回り・オドド直り）

参拝者が御輿の下をくぐる姿やメンドンの歓待は、大変ユニークで賑やかな、この行事の見せ場。子どもたちは、仮面をつけたメンドンの姿に恐れをなして泣き叫ぶ。一方で、「ヘグロを塗られると、今年一年無病息災」と伝えられている。

4 直会・月々の祭り

午後五時頃、一時間のメンドン回りを終えて、公民館に戻ると、再び公民館のステージに御輿を据えて直会となる。

直会の料理は特に決まっていないが、豚汁、おにぎり、漬物など、公民館調理室で女性部の皆さんが手作りした料理が出される。

神社や伊勢講木祠について、月々の祭祀や花香をとる当番などはないという。集落長が交代するときに神社役員の交替でもある。

〔意義〕

1 利永メンドンの概要

この行事は、県内の本土海岸部で広く伝承されている伊勢講習俗の変容の一つと言える。

これらの伊勢講の構造は、その先一年間の祭祀者（宿・会所・お旅所）を決めて送り出す「宿送り習俗」から、新しい宿までの「宿送り習俗」、新しい宿での「宿迎え習俗」からなっている。

現在の利永メンドンでは、「宿送り」を利永神社で執り行い、「宿移り」は公民館をお旅所として集落を回るメンドン回り、「宿迎え」は再び公民館に戻っての直会に相当する。

2 利永メンドンの特徴

参拝者が御輿の下をくぐり抜けて飯をもらおうオドドくぐりと、メ

ンドンによる歓待と言う、二つの特徴がある。

まず、オドドくぐりは、御輿を見下ろすことなく、その下をくぐる意味で、またオドド飯をもらおうと病気をしないというのも、いずれも参拝者にとって、正月と言う節目に、ハレの体験として、先一年間の無事を願う大切な習俗と言える。

下野敏見は、冬季に出現する来訪神として、甌島のトシドン、末吉町（現曾於市）の鬼追い、種子島の蚕舞などともにメンドンをあげ、「ヤマト文化圏南辺の南九州〜薩南諸島は、来訪神の夏・冬混合出現地域」と述べている〔下野一九八六 四三頁〕。

また、メンドン自体については、小野重朗が「このメンドンも伊勢神の化身のように思える」〔小野一九九二 七二頁〕と述べているように、御輿とメンドンという二重の神によって、集落民が無病息災を願っているものと言えよう。

3 鹿児島における伊勢講習俗としての位置づけ

伊勢神は荒々しいこと・賑やかなことを好むと言われ、この祭りの習俗も、メンドンによる歓待などその特徴をよく伝えている。メンドンの歓待は、南さつま市大浦町大木場で見られる伊勢講「オンケ」習俗での仮装や、同市笠沙町片浦で見られるケンによる歓待（模造刀で頭を叩かれると無病息災）と言った南薩各地の習俗と共通するものがある。

また、鹿児島では、伊勢講に疱瘡除けの習俗を伴うものも多い（例えば南さつま市大浦町の伊勢講宿迎えで踊られる疱瘡踊りなど）。利永でも、由来伝承として、伊勢神の力にあやかっ、疱瘡の退散を願ったことが語り継がれている。

天然痘が撲滅された現在でも、利永のメンドンは、向こう一年間

の健康を願ひ、地区挙げての行事として大切に、そして賑やかに伝承されている貴重な習俗と言える。

〔参考文献〕

- ・小野重朗 一九九二 『鹿児島島の民俗暦』 海鳥社
- ・小野重朗 一九九三 「伊勢神を叩く」『南日本の民俗文化Ⅳ 祭りと芸能』二五〇―二五七頁、第一書房（初出「同題」『鹿児島島民俗』八八号、一九八八）
- ・下野敏見 一九八六 『ヤマト文化と琉球文化』 P H P 研究所

（井上 賢一）

8

増田ますだ（種子島たねがしま）中之町の町祈禱なかのちようちようぎとう

〔別 名〕なし

〔伝 承 地〕熊毛郡中種子町増田中之町（なかのちよう）

〔実施時期〕毎年一月一七日の午後四時

〔実施場所〕中之町の増田神社

〔伝承組織〕中之町集落

〔名称〕

町祈禱（ちようぎとう）と言うが、他地区では「ハマギトウ」等と言う。

〔実施場所〕

中種子町（なかつたねちよう）増田（ますだ）中之町（なかのちよう）の増田神社で行われる。増田は種子島のほぼ中央部東海岸に面し、中之町はその中心に位置する集落である。

〔実施時期〕

新暦一月一七日の午後四時より。曜日に関わりなくこの日に実施されている。現在もそれを守っている。

〔伝承組織〕

中之町集落の行事として行われる。中之町は現在約七六戸、人口は一四八人。増田地区（増田小学校区と重なる。）はかつての増田村で、現在は行政上は中種子町の大字となっており、その中にいくつかの集落がある。中之町のほかに向井町（むかいちよう）、古房（ふるぼう）、郡原（こおりばら）の四つが古い集落である。この



増田中之町周辺



神官が矢を射る

周辺に開拓による小さな地区がある。文字通り中心となる中之町には藩政時代には増田村の仮屋が置かれ、現在は増田小学校、増田神社などがある。増田中学校もあったがこれは廃校となっている。

中之町の集落役員は、集落長一人、委員三人、五つの班の班長五人、マキ係一人、会計一人の一人で構成される。マキというのは牛馬を飼い、燃料の薪を取り、建築材料を確保するための集落の入会地で、種子島のほぼすべての古い集落はマキを持っており、集落形成の原型となった制度と言われる。マキには必ず小高い丘の上などにマキの神様が祀られている。

年間の神社祭祀や行事その他は、地区民総会以外はだいたい以上の役員の相談によって決定・運営される。行事の催行や炊き出しについてはその都度、集落民に協力を依頼する。今回の町祈祷では直会の準備に婦人数人が当たった。大字増田（旧増田村）としての祭礼や行事もあるが、町祈祷は増田の古い四集落ごとの行事である。

「由来・伝承」

この行事の由来についての伝承は特にない。集落の神社で災厄除けを祈願し、弓を射ることで災厄を追い払う呪術的な行事である。同様の行事は名称こそ違うが島内各地にある。祈祷という言葉から本来は仏教的行事と思われるが、地元民は神道（神社）の行事とみなしている。

「実施内容」

準備 当日は午前中より増田神社の掃除や準備が行われる。神社は広い舗装道路の北側の山の斜面にあり、道路脇の高い頑丈な擁壁の上の小台地に広い境内がある。山手沿いの一段高いところに拝殿、さらに高いところに神殿（本殿）がある。あらかじめ本殿の扉が開けられ、本殿前の階段下に神饌が並べられて祭祀の開始を待つ。事前に青竹で弓と矢と的が作られる。弓は直径三〇センチメートル

の太い青竹で、長さは二メートル近くあり、人間の背丈を超えている。これに太い葛（かずら）を張って弦としている。弓は四つ作っている。矢として一メートルほどの細い青竹の棒が六・七本用意されている。的（二つ）は葛でできており、直径三〇センチメートルほどの太い外輪の中に、直径一〇センチメートルほどに葛を渦巻きにして中心としている。これらは拝殿内の案に置かれ、祭典の中で神主によってお祓いを受ける。増田神社にはもと地元在住の神主がいたが、数年前から欠員となっている。年間数回の祭祀には他地区の神社の神主に依頼している。平成二九年の町祈祷には西隣の納官（のうかん）の原之里（はろのさと）に鎮座する納官神社の神主に来てもらったが、必ず納官神社神主と決まっているわけではなく、祭の日程に合わせて近隣から都合のつく神主を依頼している。ただし、平成二九年の四月からは新しい神主が地元に住する予定である。

祭典 今回の町祈祷には前記の役員の他に増田小学校長などの来賓を含む一三人（婦人も混じっている）が参列し、午後四時から行われた。神官は前述の神主一人で、自分で太鼓も叩きながら神事を進めた。まず祓い言葉を奏上、次に大幣にてお供え物、神前の左右、玉串、参列者をお祓いする。本殿の御扉は既に開いている（開扉の警蹕はない）。神饌も既に神殿前に並べられており、神主が神前の酒瓶の蓋を開けることで献饌したことになる。そのあと全員起立した中で、神主の祝詞奏上、そして神主の玉串奉奠に続いて参列者全員の玉串奉奠となる。これが終わって神饌の酒瓶に蓋をすること、撤饌とし、全員立座して一拝すると神主によって太鼓が打ち鳴らされてから、神主による神事終了の言葉となる。ここまで約二〇分ほどで、祭祀は簡略形と見てよい。なぜ簡略形なのかについて地元の方々は何も語らないが、観察者としては次のように考える。この祭は増田地区の総鎮守（旧村社）である増田神社で行われるが、増田全体の祭りではなく、その中の集落のひとつである中之町の祭りである。中之町には錦神園（きんかみぞの）神社または大海神（お

おあだ) 神社と呼ばれる集落の神社がある。なぜ地元の神社で行わずに増田神社で行うのか、いつからそのようなになったのかは、地元の方々からもはっきりとは聞くことができないものの、地元の錦神園神社が集落背後の急な階段の上にあること、深い叢林の中にあつて境内が暗く狭いこと、社殿が小さく社務所もないこと、冬期は寒いことなどの理由で、中之町に鎮座する増田神社で催行するようになったのではないかと想像される。つまり一集落の小さな祭りなので、神主による祭典も簡略化したものと思われる。

的射 拜殿内での祭典が終わるとすぐに全員が拜殿を降り、一段低くなっていく境内の屋根付き土俵の脇に移動して的射(まとい)をする。奥にある榊の木に的を吊す。的は二つあり、少し離して吊す。まず神主が北の空に向かって、「ヤア」と言いながら矢を放つ。矢は大して飛ぶことはなく、近くの樹木に当たって落ちてくる。次に村人が七、八メートルほどの距離から的に向かって射るが、矢は途中で失速するか、ヨタヨタと飛んで的を外れる。ないしは真つすぐ飛ばない。ドツと歓声があがる。婦人も混じって全員が数本の矢を代わる代わる射る。そのうち誰かの矢が的を射抜く。射抜いた人は的をもらう。三〇分ほどの的射が終わる頃は午後五時近く。南向きの境内は冬の夕日をいっぱい受け、風のないこの日はとても暖かかった。

塞神(さいのかみ) 一方、祭典が終わわり、参列者が境内に移動すると同時に、拜殿入口のお賽銭箱の前には、各戸の表札ほどの大きさの木札が置かれている。表に大きく「塞神」と書かれ、裏には持ち主の名前が小さく書かれている。これが三五個ある。事前に神社に提出された木札に、現在は集落長が「塞神」と書いて準備しておいたものである。三々五々、祭典の終了時間を見計らった村人が、参拝を兼ねてこれを受け取りに訪れる。持ち帰って各自の玄関の外側に掛けるのである。集落の戸数と一致しないのは、これを掲げない家も多くあることを物語る。

辻札 境内での的射が終わると、二、三人ずつの二組に分かれ、

それぞれ軽トラックに乗って、辻札を集落の周辺に張るために出発する。辻札は細長い紙製で、五〇センチメートルほどの青い細竹の上部を少し割って挟んでいる。中に文字が書かれている。それを両側から折って包んでいるので見えないが、「奉斎 八衢比女神 八衢比古神 久那止神 守給幸給伎」と書かれている。右の三柱の神名は縦に並べて三行で書かれている。村人たちは何が書かれているのか、何と読むのかも知らない。「伎」は「ところ」という意味なので、右の三神が「守っているところ、幸をもたらしているところ」を表現している。辻札といったが、これは観察者の呼称で、正式名称は地元民も知らない。文字は神主が書いて紙で包んだものを持参したものである。これを地元の方が受け取って竹棒に挟む。①向井橋たもと、②馬立峰(またてのみね)、③秋佐野入口、④組の野(くみのの)、⑤下の丸(しものまる)、⑥下の平(しものたいら)、

⑦松元の七か所の集落境に刺す。刺す時の呪文など何もない。

直会 三〇分ほどで差し終えて戻ってくると、境内脇の社務所に全員が集合し、長机の両側に坐すと、狭い畳の部屋はいっぱいとなる。挨拶があつて直会が始まる。まだ明るさの残る冬の陽は、まもなくすっきり落ちて暗くなる。夜九時頃まで続く。途中で木札(塞神)を受け取りに来た村人の参加もあつて、賑やかになる。

「意義」

種子島の主邑西之表の栖林(せいりん)神社では、正月一日に「大的开始」という行事が行われる。本格的な射的競技である。同時に、島主の菩提寺であつた本源寺(法華宗)では、国禊会(こくとうえ)という徹夜の読経が開始される。両方とも室町時代の明応年間(一四九二〜一五〇一年)から島主主催のもとで行われてきたもので、鹿児島県無形民俗文化財に指定されている。この二つの行事がセットになって、島内の各集落の年頭の行事として広まったものと思われる。

中之町のチョウ祈祷も集落単位の災厄除けの行事で、中心は祓い



写真1 塞神と書いた札



写真2 神主が矢を射る



写真3 弓・矢・的



写真4 辻札を立てる

の祈願（祈祷）をし、弓を射ることにある。同様の行事は、種子島のほぼ全ての古い集落にあり、名称はチョウ祈祷のほか、ハマ（破魔）祈祷・春祈祷・初祈祷など様々である。西之表市現和（げんな）の本村（もとむら）ではシブタ（またはシュータ）突きという。的を射る方法にさまざまなバリエーションがあるわけである。シブタ（シュータ）というのは小さなものことで、これを一方が転がし、他方がこれを止めるといったやり方である。また神主でなく、中之町の隣の向井町などのように僧侶が行うところもある。むしろこの方が古い形であろう。この場合、辻札の中の文字も形状も中之町とは違うが、何が書かれているかは村人も知らない。立てたままにし、風雨で朽ちるにまかせる。

「その他」

正月に弓を射る行事は全国にある。歩射・奉射・御弓（おゆみ）神事・曇目（ひきめ）神事などとも呼ばれる。鹿児島でも各地にあり、薩摩半島ではハマテゴとも呼ばれ、子ども達の行事となっている。種子島ではこれが現在も、神主または僧侶による祈祷と結びついており、全国諸所の行事よりも古い形を残していると言えよう。

「参考文献」

- ・下野敏見 一九六九 『タネガシマ風物誌』 未来社
- ・下野敏見 一九九〇 『種子島の民俗Ⅱ』 法政大学出版社

（松原 武実）

9

せうた
節田マンカイ

〔別 名〕 正月まんかい

〔伝 承 地〕 奄美市笠利町節田

〔実施時期〕 旧暦正月

〔実施場所〕 節田集落公民館

〔伝承組織〕 節田まんかい保存会

〔名称〕

伝承集落の年配者は「正月まんかい」と言っているが、「節田マンカイ」と多くの人々は言い、鹿児島県無形民俗文化財に指定されたときの名称が「節田マンカイ」であるので、これを名称とする。

〔伝承地〕

古くは笠利町内の各集落で行われていたが、現在（二〇一七年）節田集落だけに残っている芸能である。

各集落に残されていた頃もそうであるが、元々正月各家庭に人々が集まった時に行っていたが、約二〇年位前から公民館に集まって行うようになった。

〔実施時期〕

戦前は大晦日の晩から正月・旧暦正月などに行われていた。昭和三九（一九六四）年の奄美大島空港開設時に記念行事の中で演じられたり、全国民俗芸能大会や県立奄美パークでの公演など正月以外にも舞台上での演技も行われてきた。しかし、ここ数年は旧暦正月の一回だけ公民館に集まって行うことになっている。



奄美市笠利町節田周辺



節田マンカイの様子

「伝承組織」

節田マンカイ保存会は節田集落民全員(子どもから大人まで)が保存会員となっており、自治会長が保存会会長を兼務する。

「由来・伝承」

明治初め頃、大笠利出身の女性が節田集落に嫁いできて、この踊りを広めたとも言われているが確かな由来は不詳である。

「節田マンカイ」の節田は集落名で「マンカイ」の定説はなく、正月を招くとか幸せを招くというふうに言われている。この招くという所作が、手を左右にゆっくり動かす動作から波を表現しているとも集落の方々は話している。

もともとは正月に各家庭で親戚や友達が集まった時に、即興で男女がお互い歌を返しあつて歌うもので、相手の歌った意味や語呂合わせなどから、即興で作り返答しながら歌い続けた。

それがいつの間にか公民館や生活館という公の施設で、歌も固定した歌で行うようになり現在に至っている。

伝承地域も現在は節田集落だけとなっているが、古く明治の初め頃、東海岸の集落にはほとんど正月まんかいはあり、昭和の初め頃から本格的に行われていたようである。この演じる場は男女の出逢いのきっかけを作る場としても男女が参加しやすくなった。

「実施内容」

旧暦正月に行われる手踊りである。

会場である生活館に三々五々集まり、会場作りや料理の準備を始める。会場には座布団を二列一組の座席を四か所作る。ここに歌い手であり手踊りする男女が一列ずつ、それぞれ向かい合つて座る。人数に制限はないが男女同数が望ましい。しかし、偶数であればできるので老若男女問わず参加する。その他、チ

ヂン(太鼓、写真1)一人、サンシン(三味線)一人の椅子席が前方に作られる。チヂンは元々あつたが、サンシンがいつ頃から加えられたかは不明である。

手踊り(歌)の順序は「正月まんかい」、「塩道長浜」、「前徳王」と続けて行われ、最後に会場全員参加による「八月踊り」で終わる。

以前は、一曲終わるごとに休憩があつたようであるが、近年は座つたまま三曲続けて合唱・手踊りをし、全員が立ち上がり見学者も一緒に八月踊りで締めくくる。

1 正月まんかい

手踊りに入る前に拍手をする。続いて体を左右に揺らしながら両手を左右に波をイメージしながら振る。

男性が歌い続いて女性が歌う。歌い終わったら手拍子をし、男性が歌い女性が歌って手拍子をするという動作を繰り返す(写真2)。歌詞は写真3のとおりである。

2 塩道長浜

この歌の塩道長浜というのは喜界島の浜の名称である。この浜に童の亡霊が泣いている。ある男性がケサマツと言う女性に強引に迫つたため命を落とすことになり、

この亡霊が夜な夜な泣いているという悲劇を歌ったものである。



写真2 節田マンカイの様子



写真1 チヂン

始めに拍手をし両手を自分の肩に持つてくる。向かい合った男女が手を合わせる。という所作を曲に合わせで行う。

3 前徳王

所作は塩道長浜とほぼ似たようなもので、拍手をしながら歌う。

明治の初め頃、手花部集落に糸繰屋があり娘たちが糸繰をしているところに手花部の戸長が来た。ここでの戸長と娘たちのやり取りしたことが歌になっている。

4 八月踊り

参加者・見学者全員による八月踊りで締めくくりとなる。

踊りが終わった後、旧暦正月を祝う会が開かれ「アザンヤセ」という奄美の正月料理とおにぎりが出される。この正月料理はウワンフニ（豚の骨）料理で豚骨とアザミの葉脈を煮たものである（写真4・5）。

アザンヤセは年越しそばのようなもので、年の晩には必ずといってよいほど食べていた。

【意義・考察など】

節田マンカイは、男女がお互い歌を掛け合いながら手踊りする歌遊びである。

現在の節田マンカイの様子をみると、座布団の上に男女がそれぞれ一列ずつ座り、その場で歌を掛け合い



写真4 アザンヤセ（正月料理）

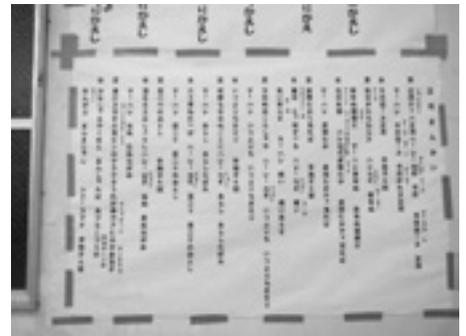


写真3 正月まんかいの歌詞

ながら手踊りで招く所作やお互いが手を合わせるなど歌に合わせて行っているが、『南島雑話』や『南島雑話の世界』などをみると、藩政時代の奄美では男女がお互い歌を掛け合い踊る古代の「歌垣」、「歌かがい」と同様の男女の歌遊びが行われていたことが掲載されている。

そこには、今のように膝を突き

合わすような狭い場所で行われていたのではなく、男女が二間ほど離れて向かい合って座り、手でリズムをとりながら双方がにじり寄りながら、相手を招くような所作で手踊りをしながら、歌の調子に合わせて後下がりにつつ元の座に戻るといった動作をしていたとある。

現在は、このように即興で応答する歌い方ではないが、「歌垣」や「歌かがい」のような芸能を子どもたちにも伝承していくことは貴重である。また、その場を移動することもなく固定の場所での手踊りである。

「正月まんかい」の歌の順序について詳しく調べていくと『節田抄誌』に正月マンカイ『マンカイ・祝い唄』として次のようにある。

- 一 改まる年に 炭と昆布祝てい 子孫打ち揃てい 果報な祝い
- 二 元日ぬ朝 床間向かてい見りば 裏白とゆずいる 祝い美らさ
- 三 今日ぬ誇らしや 何時よりむ勝り 何時ぬ今日ぬ如に有らし給れ
- 四 正月よ正月 今日迄ぬ正月 明日迄む無るぬ 来年ぬ期



写真5 旧暦正月を祝う会

問
五 遊び座真ん中に 三合瓶や転々 それを放置 アヒルぬ卵

この祝い唄をみると、一番の「改まる年に 炭と昆布で祝てい 子孫打ち揃てい 果報な祝い」が最初にくると全体の歌詞の意味がよく通じてわかりやすい。

長い間に歌詞も順序が入れ替わったり所作も変化していく。しかし、試行錯誤しながらでも伝統芸能を伝承していくことが大切である。

昭和の初期は男女が一緒にいることが世間から非難の目で見られたが、この「正月マンカイ・節田マンカイ」の時だけは男女楽しく過ごすことができたと言う。一種の男女の出逢いの場でもあった。

旧暦正月には節田マンカイだけではなくナンコ遊びも子どもと一緒にするという(写真6)。ナンコの道具一式は家を新築した時に同窓生や親戚・友達などの色々な関係者から贈られるもので、どの家庭にも立派なナンコ道具一式が備えられていると言う。

「節田マンカイ」は歌や手踊りだけでなく、郷土料理・古くからの遊びを含めて小学生の子どもから年配者まで、集落の人々によって伝承されている貴重な芸能である。



写真6 子どもたちのナンコ遊び

【参考文献】

- ・小川学二〇一一 「奄美の歌掛け」『歌の起源を探る垣』三弥井書店
- ・小川学夫 一九七九 『奄美民謡誌』 法政大学出版局
- ・小川学夫 二〇〇八 「節田マンカイ」『鹿児島県文化財調査報告書第五四集』 鹿児島県教育委員会
- ・竹時雄 二〇〇三 『節田抄誌』 自家本
- ・名越左源太 一九八四 『南島雑話2』 東洋文庫432平凡社
- ・名越護 二〇〇二 『南島雑話の世界』 南日本新聞開発センター

(牧島 知子)

〔別 名〕	オイセコウ・オイセドン
〔伝 承 地〕	南さつま市笠沙町片浦
〔実施時期〕	毎年二月一日
〔実施場所〕	片浦公民館・片浦漁港
〔伝承組織〕	片浦公民館

〔名称〕

天照大神を祀る伊勢神宮の大森を納めた木祠のご神幸行列を行う祭りで、片浦公民館では現在は「お伊勢講祭り」の名称を用いている。もともと単にオイセコウ（お伊勢講）、オイセドン（お伊勢殿）とも呼ばれていた。

〔実施場所〕

高台にある片浦公民館で神事を執り行った後、集落内をご神幸し、漁協前から旧道を通って片浦漁港の防波堤に向かう。道中五か所で行列をとめ、狐などの面をつけた「振り子」役が四方に散って、見物人を採り物で叩き（祓い）、賽銭を集める（採り物はケン・ナギナタと呼ばれる模造刀）。集め終わると再び整列してご神幸を再開する。防波堤で一振り（振り子が肩に乗せた採り物を左右に振ること。）した後、帰路は新道を漁協まで進み（現在は途中一回止まる。）、漁協前でご神幸を終える（図1）。

〔実施時期〕

毎年二月一日で、午後二時から神事、三時ごろからご神幸がみられる。この日は南さつま市笠沙地域・大浦地域・加世田地域でも、お伊勢講が行われている。



図1 ご神幸経路（印は行列の停止場所）



写真1 振り子の面



写真2 ケンで叩かれる子ども

「伝承組織」

片浦公民館の行事。『笠沙町の民俗・上巻』によれば、「村落の役員達の間でクジ引きにより宿を決めて一年交代で祀っていたものが、戦後、公民館に移された。…二才入りの二才祝いがあつた後でオイセドンをする」（九六頁）という。

片浦ではもとの紀元節（現在の建国記念の日）に青年団に入る（二才入り）習慣になっていた。二才入りという、一人前として認められる人生の節目に、これら青年を中心に、伊勢講の祭りが行われるようになったという。現在も男子だけが振り子になる。近年は青年の数が少なく、他の集落の中学生にも参加を呼び掛ける。学校再編で大笠中学校となったので、大浦の中学生にも協力してもらっている。二〇一六年の大笠中学校生徒協力者は九人のうち片浦は二人であった。

「由来伝承」

片浦は、享和二年、天保一四年、昭和一九年に三度の大火に見舞われ、講帳などが伝わっておらず、起源・由来は明らかでない。

伝承によれば、代参講として起こり、のち伊勢神を勧請して祭るようになったため、代参は行われなくなったとされる。

当初は、毎年祭る宿を決めて、一年間その家で祭つたという。集落がほとんど全焼した天保一四年の片浦大火の際、焼け残つた一軒が伊勢神の宿で、これはお伊勢さまの神意によつて火事から免れたと伝わる。それ以来、宿が山手に決まつた時は、必ず何か異変が起こるに違いないからと言って、集落民全員が、特に火の用心に努めたと言う。この伝承に従えば天保一四（一八四三）年以前から伊勢講があつたことになる。その後、いつの頃からか、現在のようなご神幸行列を行う

ようになったとされる。

「実施内容」

1 道具立て・用具類

皇大神宮の大麻を納めた木祠は、「カンサア」と呼ばれ、幅四五センチメートル、高さ八四センチメートル、奥行き四五センチメートル。ご神幸行列では、これを台座に乗せ神輿とする。その木製の台座は、長さ一八二センチメートル、幅六〇センチメートル、高さ七・五センチメートル。

この木祠は、以前は集落役員（評議員と言う）が、くじ引きをして宿を決め、その家で一年間祭つていた。その後、公民館で祭られるようになった。当初は付近に住んでいた宮司に頼んで祭り、今は公民館長・主事が管理している。

ご神幸行列の先払いとなる振り子は、女装してほおかぶりに鬼や天狗などの道化面を着け、素足で、模造刀のナギナタかケンのいずれかを持つ。

面には実測したものには次のようなものがある（幅×高さ×厚みの長さ。写真1の左下から）。天狗面（二五×二九×一六センチメートル）。朽ちている）、ひよつとこ面（二七×二〇×七センチメートル）、鬼面（一八×二〇×七センチメートル）、般若面（一六×一九×八センチメートル）、狐面（二五×二二×八センチメートル。口が動く）、狐面（一四・五×二三×九センチメートル。新しいもの）、おたふく面（一七×二〇×四）、ひよつとこ面（一五×二一×六センチメートル）、エビス面（一八×二四×七センチメートル）。

ナギナタは、全長一三五センチメートル。うち柄は長さ九九センチ

メートル・直径四センチメートル、刃は幅六・五センチメートル、厚さ一センチメートルで、杉板に銀紙を巻いてある。

ケン は全長一二九センチメートル。柄の長さ九七センチメートル・直径四センチメートル、柄にはリボンがつけてある（三七センチメートル）。刃の幅は六・五センチメートルで、金の色紙を巻いている。

行列に使う道具類には、他に以下のものがある。

○ 鉦：一組。平成二年購入したシンバル。直径三一センチメートル。

○ 幟：二本。長さ一七六センチメートル、幅三三・五センチメートル、朱地。

○ 挟み箱：二つ。幅四四、高さ二三・五、厚さ一六センチメートル、ナギナタをかつぎ棒にする。

○ 太鼓：一つ。直径四四、長さ四一センチメートル。太鼓を担ぐ棒は一八センチメートル、直径五センチメートル、紅白の縞模様を巻いてある。バチはカタギで長さ四六センチメートル、直径二・五センチメートル。

○ 賽銭箱：長さ九〇センチメートル、幅三五センチメートル、高さ七センチメートル。ダンボールで蓋をしている。

振り子の衣装は、古くはそれぞれの振り子の家の襦袢や親戚の女性の持ち物を借りてきて着ていた。しかし、着ている衣装で誰が振り子になっているか分かったり、衣装比で金がかかりすぎると批判が出て、公民館で買いそろえることになったという。伝わっている衣装箱の蓋に、「御伊勢様御供勢子衣装類 昭和六年式月例祭新調 一、衣装二九人前 一、帯二九人前」とある（写真8）。

鉦・幟・挟み箱・太鼓持ちも、振り子と同じ装束（面・女装・はだし）で、カンサア持ちは白装束に烏帽子をかぶり、墨で髭を書く。

2 準備・神事・式典

当日は午前八時から、女性部がぜんざいなど料理の準備を始める。

午後二時半から野田神社宮司による神事・祭典が執り行われる。

神事では、初めて振り子となる数え年一五歳の二才に、人生の節目

に当たり、健康で立派な青年に育つようと、その無事を祈る祝詞があげられる。次に公民館長、振り子代表、来賓、女性部の順に、玉串奉奠。

その後式典となり、公民館長挨拶、来賓祝辞が行われる。

出発前には、ご神幸の無事を願う意味でしばらく間合いを取る。振り子にはぜんざい（昔は甘酒）、集落役員や来賓には酒をふるまう。

3 ご神幸

公民館から集落を反時計回りに、防波堤の灯台に向かう。帰りは漁協向かいの消防団詰め所前まで行列を組み、そこで解散して各自公民館へ戻る。

ご神幸行列の順は、鉦一人（シンバル。上級生がもつ。）↓幟二人↓振り子（二列でケンかナギナタのいずれかを持つ。実見した二〇一六年は七人×二列で一四人）↓挟み箱二人↓太鼓持ち（二人で一つの太鼓を担ぐ。）↓カンサア持ち（二人で一つの木祠を担ぐ）↓宮司（一人）・稚児（二人。小学校入学前の男児。）↓賽銭箱持ち（一人）↓集落役員と続く。

道中、太鼓の合図で振り子が、肩に担いだケン・ナギナタの採り物を左右に揺らし、「オイヤナー、オイヤナー」と唱える。鹿児島弁で「いらっしやいますかー」という意味で、賽銭を集めて回るときの掛け声。昔はこの後に、「ツッケンケン」と続けていたと言う。停止場所では振り子が四方に散り、これぞと思う観客を叩いて回り、賽銭を請う。「喧嘩みたいにもなる。面をつけているので先生も叩けた。ケンやナギナタもよく折れて、作り直した。」と言う。

叩くのは祓う意味もあると思われる。叩かれた人は、一年間無病息災で、縁起が良いとされる。観客側では、振り子が面をかぶっているのに誰に叩かれたか分からない。そこに面白さがあると言う。隣の集落まで追いかけたという話も聞かれた。

賽銭を集め終わると、チャンチャンチャンという鉦の合図で再び整列し、ご神幸を再開する。防波堤では野間岳（南）に向かって



写真5 整列し直して再びご神幸



写真3 公民館での神事



写真6 片浦防波堤での振り子



写真4 公民館を出発

整列して「オイヤナー、オイヤナー」と唱え一振りする。
 同じ南さつま市の大浦地区ではお伊勢講のときに、疱瘡踊りがみられるが、片浦では見られない。

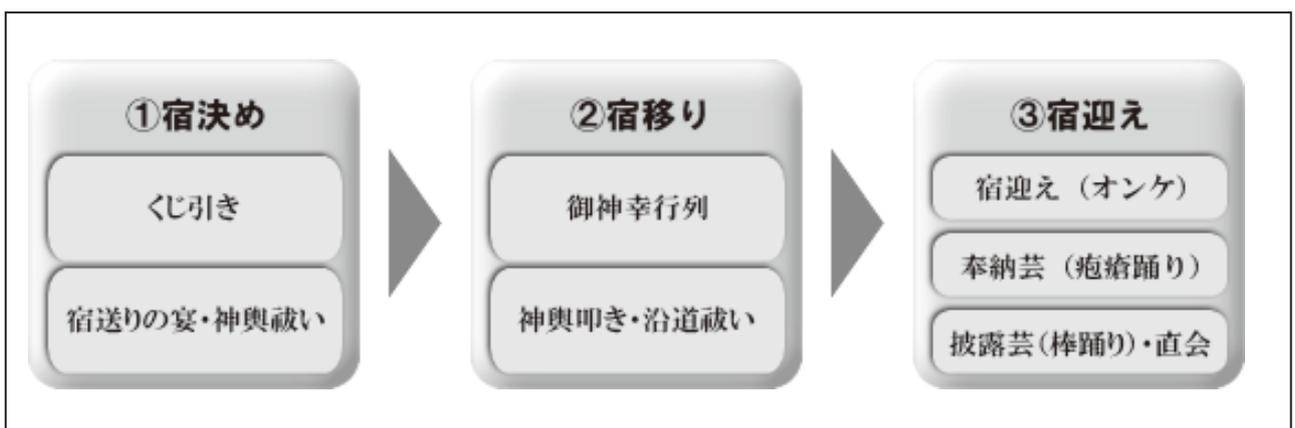


図2 南さつま市における伊勢講習俗の構造



写真10 片浦公民館の伊勢講木祠



写真7 お伊勢講の稚児



写真11 片浦お伊勢講の御神幸行列



写真8 昭和6年新調時の衣装箱

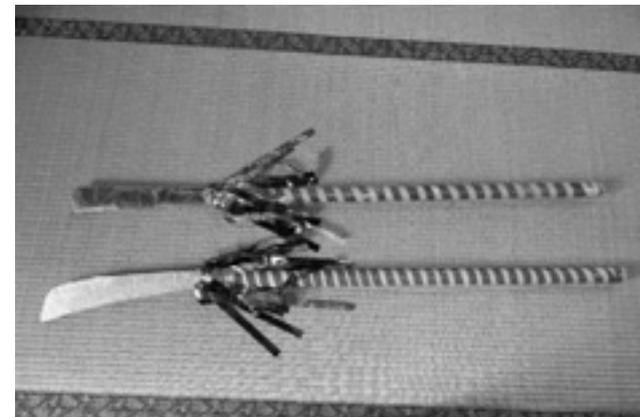


写真9 振り子のケンとナギナタ写真

4 二才入りの祝い

ご神幸が終わると各自公民館に戻り、二才入りの祝いがある。そのあと、新振り子の家で公民館役員（昔は青年団の人たち）、親戚、知人、集落民、誰ももなく呼ばれ、二才入りした新振り子の成長を祝福し、夜遅くまで祝いの宴が続く。

【意義】

南さつま市内には、各地に御伊勢講行事が残る。特に市西部では盛んで、大浦町には疱瘡踊りが伝承されている。南さつま市における伊勢講行事は、その先一年間の祭祀者（宿・会所・お旅所）を決める「宿決め習俗」から始まり、新しい宿までの「宿移り習俗」、新しい宿での「宿迎え習俗」と続く（図2）。

笠沙町では宿移り（御神幸行列）に重点が置かれ、大浦町では宿迎え（疱瘡踊り・棒踊り）が盛ん。加世田の御伊勢講は大浦町から伝播した可能性がある（小湊の疱瘡踊り・上津貫の宿移り習俗など）。また、金峰町・坊津町でも伊勢講行事・疱瘡踊りが伝承されている。

御伊勢講は、もともと伊勢神宮参拝の経費を捻出するために作られた「代参講」の一つ。薩摩半島では、こうした本来の目的とともに、賑やかなご神幸行列や疱瘡踊りが付随して伝承されているのが特徴である。

笠沙町の御伊勢講は、仮装を伴うにぎやかな宿移り（御神幸）が特徴となっている。その行事は、漁村部と農村部の二系統に分けられる。

漁村部の野間池・片浦・小浦の伊勢講は、二才入り（青年団入団）というイニシエーションを伴い、伊勢神の集落巡幸の中で豊漁祈願と集落民の無病息災を願う。

農村部の赤生木では、西隣の大浦町の御伊勢講と同様に、疱瘡踊りを伴い、疱瘡退散と新年（旧暦一月一日）を迎え先一年間の集落民の無病息災を願う。赤生木伊勢講には、御師が文化一四（一八一七）年にもたらした掛け軸が伝わっている。近世の薩摩における御師の活躍を垣間見ることが出来る貴重な資料と言える。

【参考文献】

- ・野敏見編 一九九〇 笠沙町民俗文化財調査報告書（二）笠沙町の民俗・上巻』 鹿児島県笠沙町教育委員会
- ・編纂委員会編 一九九三 『笠沙町郷土誌・下巻』 鹿児島県笠沙町

（井上 賢一）